

川南町の埋蔵文化財

遺跡詳細分布調査報告書

1983. 3

宮崎県児湯郡川南町教育委員会



川 南 町 全 景

序

川南町は、宮崎県の中部に位置し、気候温暖な土地で、千数百年前から、人が住み、かつての栄光を物語る川南古墳群（1961年2月国指定）があり、1980年2月には、円形周溝墓が、1981年3月には、方形周溝墓が発見され、日向の古墳出現前夜の墓制を知るうえで、貴重な資料として保存されています。一方この川南町の台地は、近年大型機械導入等によって耕耘され、一般農作物の栽培をはじめ、大型鶏舎、豚舎が建ち、食糧基地としての大型農業に転換されようとしています。それに伴って、埋蔵文化財が出土するが多く、遺跡分布調査は、埋蔵文化財の保護上からも急を要する事業であり、この度、文化庁、宮崎県教育委員会の御指導により、遺跡の分布調査を実施した結果、先土器、縄文、弥生、古墳時代の遺跡の分布状況を確認することができ、報告書としてまとめました。

わが里を愛する町民と共に、遠い昔を偲び、古代からのかけ橋となる文化財を保存し、その活用を図り、歴史を解く資料ともなれば幸せです。ここに収めた遺跡の所在地は、文化財保護法における「周知の埋蔵文化財包蔵地」であり、開発等にあたっては、法の趣旨を理解され、事前に十分な協議を関係教育委員会等とおこなわれることをお願いします。もとより、埋蔵文化財は、地下に埋れている場合が多く、地表観察による遺跡の確認には限界があります。そのため遺跡の正確な範囲を確定することは極めて困難でありますので、今後さらに追加、補充を期さなければなりません。

この調査に当り、県教育委員会、調査員の方々をはじめ、文化財保護審議会委員、町民の皆さま方の御理解と御協力に対し厚く御礼を申し上げ序と致します。

1983年3月

川南町教育委員会 教育長 小嶋 進

例　　言

1. 本書は、川南町教育委員会が昭和57年度に文化庁・県教育委員会の補助を受けて実施した遺跡詳細分布調査の報告書です。
2. 本調査は、埋蔵文化財に関する調査であり、内容は当町全域を対象とする埋蔵文化財包蔵地調査カード及び遺跡分布地図の作成であります。
3. 本書の構成は、地理的環境・歴史的環境を述べ、遺跡地名表・主要遺跡概説・遺物実測図・附図の遺跡分布地図から成ります。
4. 本書に掲載された埋蔵文化財は、すべて文化財保護法にいう「周知の埋蔵文化財包蔵地」です。
5. 「周知の埋蔵文化財包蔵地」において、土木工事等を実施しようとする場合には、工事着手の2ヶ月以前に文化庁長官に届け出ることが文化財保護法により義務づけられていますので、「周知の埋蔵文化財包蔵地」およびこれに隣接する地域において土木工事等を実施しようとする場合は、計画段階において川南町教育委員会（川南町大字川南13680番地1・TEL09832-7-1021）および県教育委員会文化課（宮崎市橋通東1丁目9番10号・TEL0985-24-1111）に連絡し、文化財保護法による協議をされたい。
また、国および地方公共団体等が土木工事等を実施する場合には、土木工事等の通知書を提出することが必要です。
なお、埋蔵文化財は、その性質上未発見のまま地中に包蔵されている場合があり、工事等により当該文化財が発見された場合にも前記と同様、川南町教育委員会および県教育委員会文化課に連絡してください。
6. 本書および、埋蔵文化財に関するお問い合わせは、川南町教育委員会および県教育委員会文化課へお願いいたします。
7. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得た、同院発行の25,000分の1地形図を複製したものです。（承認番号）昭和49九複第35号

凡 例

- 埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」）は、地図上に赤色で示した。古墳の場合には一基づつは ● で示し、古墳群の場合にはこの範囲を で示した。また古墳以外の遺跡で範囲の確認、推定できるものは で示した。
- 地図の「遺跡番号」は、すべて地名表のそれと一致する。
- 「遺跡番号」は、集落跡・散布地・城跡等は一番号とし、古墳群・窯跡群については群に対し一番号を付した。
- 各遺跡を大字で分け、1000番台は川南地区、2000番台は平田地区とした。
- 遺跡名は、原則として小字名にしたがい、一部のものについては、通称、俗称によった。
- 遺跡の所在地は、大字名、小字名で示した。地番については、川南町教育委員会および県教育委員会文化課へ問い合わせられたい。
- 調査の組織

調査主体 川南町教育委員会

小嶋 進 教育長

黒木 修 社会教育課長

河野 健二 社会教育係長

繁富 勉 社会教育主事（調査担当）

調査員 長岡 信治 東京都立大学大学院理学研究科

調査補助員 遠藤 学 川南町文化財保護審議会委員

新藤 繁秋

福長 一

永友 芳弘

村井 格二

坂本 敏明

調査補助員 河野 庄次 川南町文化財保護審議会委員
タ 稲井 裕子 奈良大学学生
タ 養方 政幾
タ 高橋 加奈子

調査指導 長津 宗重 県文化課主事
タ 日高 孝治 タ

8. 現地における踏査は、繁富・遠藤が行なった。
9. 踏査にあたっては、「宮崎県遺跡台帳」等を基礎としたが、県文化財保護審議会委員および川南町文化財保護審議会委員など地元研究者の長年の調査研究によるものが大であった。
10. 本書の執筆には、「川南町の地質と地形の概括」を長岡信治氏に、その他について長津・日高が当り、実測・トレース等については、長津・日高・稲井・養方・高橋が分担して、編集は、長津・日高・繁富がおこなった。

総 目 次

I 総 説

1. 川南町の地質と地形の概括.....	1
2. 川南町の歴史的環境.....	6

II 埋蔵文化財包蔵地地名表

III 主要遺跡概説

IV 川南町関連文献目録

附図 川南町遺跡分布地図

挿 図 目 次

第1図 通浜付近の火山灰柱状図.....	1
第2図 川南町周辺の地形面区分図.....	3
第3図 地形・地質断面図（I）.....	4
第4図 地形・地質断面図（II）.....	5
第5図 東平下A遺跡（周溝墓群）の遺構分布図.....	21
第6図 東平下2号方形周溝墓遺構図.....	22
第7図 東平下2号方形周溝墓出土土器.....	22
第8図 東平下1号L形周溝墓出土土器.....	23
第9図 丸山西原遺跡の遺構分布図.....	26
第10図 下原遺跡の遺構分布図.....	28
第11図 大迫遺跡の遺構分布図.....	30
第12図 川南古墳群の分布図.....	33

図 版 目 次

図版1 旧石器.....	谷ノ口、住吉B、桶風呂、卒手遺跡.....	37
--------------	-----------------------	----

図版 2	縄文土器(Ⅰ)	塩付、大塚山、形山上、旭ヶ丘、下唐瀬遺跡.....	38
図版 3	縄文土器(Ⅱ)	赤石、住吉B、丸山西原、野田原、萩原A、 湯迫、大久保遺跡.....	39
図版 4	打製石器(Ⅰ)	番匠A、西原、向原A、孫衛門、形山上、 黒岩、市納上、森島、豊坂、椎原、赤石遺跡.....	40
図版 5	打製石器(Ⅱ)	赤石、住吉B、丸山、野田原、宮ノ原、 白鬚原、大迫、卒手、萌牟田、野稻尾、 大久保遺跡.....	41
図版 6	石 器 (Ⅰ)	形山上、八幡、込ノ口、住吉B、把言田、萌牟田、 後牟田遺跡.....	42
図版 7	石 器 (Ⅱ)	大塚山、下ノ原、八幡、村上A、湯迫、新湯迫、 野稻尾、萌牟田、後牟田遺跡.....	43
図版 8	弥生土器(Ⅰ)	塩付、下ノ原、赤石、前原B、萌牟田遺跡.....	44
図版 9	弥生土器(Ⅱ)	塩付、明原、下ノ原遺跡.....	45
図版10	弥生土器(Ⅲ)	下ノ原、形山上遺跡.....	46
図版11	弥生土器(Ⅳ)	寺屋敷、黒岩、村上A、唐瀬東原遺跡.....	47
図版12	弥生土器(Ⅴ)	丸山西原遺跡.....	48
図版13	弥生土器(Ⅵ)	赤石、丸山西原、大内遺跡.....	49
図版14	弥生土器(Ⅶ)	大迫、須田久保、樋風呂、前原B遺跡.....	50
図版15	弥生土器(Ⅷ)	唐瀬東原、大迫、焼山遺跡.....	51
図版16	弥生土器(Ⅸ)	丸山西原、大久保原A、白坂谷遺跡.....	52
図版17	弥生土器(Ⅹ)	大久保原A、毘沙門遺跡.....	53
図版18	弥生土器(Ⅺ)	白坂谷遺跡.....	54
図版19	弥生土器(Ⅻ)	町内出土(出土地不明)	55
図版20	石庵丁	形山上、古場山、黒岩、山本、香田原、 赤石、野田原、大迫、中ノ迫A、湯迫遺跡 町内出土(出土地不明)	56
図版21	磨製石器、勾玉、土錘、紡錘車	下肥B、黒岩、赤石、大迫、須田久保、 湯迫遺跡.....	57

図版22	須恵器	川南古墳群、南牧原、旭ヶ丘、赤石、前原A、 上ノ原北分B遺跡、町内出土（出土地不明）……	58
図版23	打製石鎌	番町A、西原、向原A、形山上、黒岩、旭ヶ丘 市納上、霧島、豊坂、北原、赤石、椎原、 住吉B、丸山、丸山西原、野田原、白鬚原、 大迫、卒手、野稻尾、大久保遺跡……………	59
図版24	石庵丁、石鎌、石匙	黒岩、山本、赤石、住吉B、大迫、 須出久保、野稻尾遺跡……………	60
図版25	弥生土器	塩付、寺屋敷、村上A、唐瀬東原、丸山西原、 大内、大久保原A遺跡……………	61
図版26	弥生土器、須恵器	樋風呂、毘沙門、大迫、新湯迫、白坂谷、 町内出土（出土地不明）、上ノ原北分B、 赤石遺跡……………	62

I 総 説

1. 川南町の地質と地形の概括

2. 川南町の歴史的環境

卷之三

清江先生集序

清江先生集序

清江先生集序

1. 川南町の地質と地形の概説

川南町の地形は上面本山（1,040m）を中心とする山地とその東麓から海岸にかけて広がる段丘に二分することができる。山地の地質は、中新世のデイサイト質、流紋岩質溶凝灰岩及び花崗斑岩からなる尾鈴山酸性岩類が構成している。（中田・1978年）

段丘は、広い平坦面を持っているため、古くから人間の生産活動の場でもあった。川南町の遺跡も大部分が、この段丘面上から発見されている。川南原、国光原などの「原」がつく地名も段丘面の平坦性に由来していると考えられる。

しかしながら、段丘は一連の平坦面ではなく、巖によって、数段に区分される。上位の古いものから、青鹿面、茶臼原面、国光原面、唐瀬原面、川南原面、高城面、豊原Ⅰ面、豊原Ⅱ面、常盤面、平田面、伊倉面、高森面、三日月原面、竹浜面の14面が識別できる。

これら段丘地域の地質は大きく三つの地層からなる。下位より段丘堆積物の基盤である。宮崎層群、段丘そのものをつくる段丘堆積物、南九州の火山から噴出し、段丘形成後に段丘面上に堆積した風成火山灰層が構成する。宮崎層群は、中新世～鮮新世の浅海に堆積した砂やシルト層で、多数の貝化石を産出する。（首藤・1952年）

段丘を直接構成するのは、かつての小丸川や平田川、名貫川が運んだ砂礫層である。また国光原面のように、昔の海底（内湾）に堆積したシルトや砂からなるものがある。通浜の崖などの露出しているシルトや砂も、その一部である。しかし、後に川南原面の礫層におおわれ、段丘面は残していない。

こうした段丘面は今から50万年前から2万年前の氷河期や間氷河期に形成されたと考えられている。

段丘面上を被う風成火山灰層は、一般に古い段丘面ほど厚さが大きい。風成火山灰層は上部が墨土化している他は全体に褐色を呈している。風成火山灰層中には、数枚のスコリア層や軽石層が含まれている。この中で最上位のアカホヤ層は、噴出起源を鬼界カルデラとし、その年代は約6,000年前と考えられており、繩文早・前期の指標として極めて有効な鍵層である。（町田、新井・1978年）

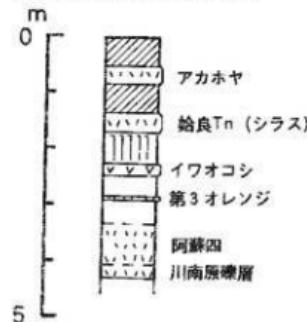
またその下位の始良・丹沢絆石層は、始良カルデラ（錦江湾）形成のときに噴出されたシラスの一部で東日本にまで広く分布している。またその年代が約21,000年前と考えられていることから旧石器時代にかかる重要な軽石層である。（町田、新井・1976年）

また義島や阿蘇に由来する火山灰層も見られる。

（長岡信治）

文献

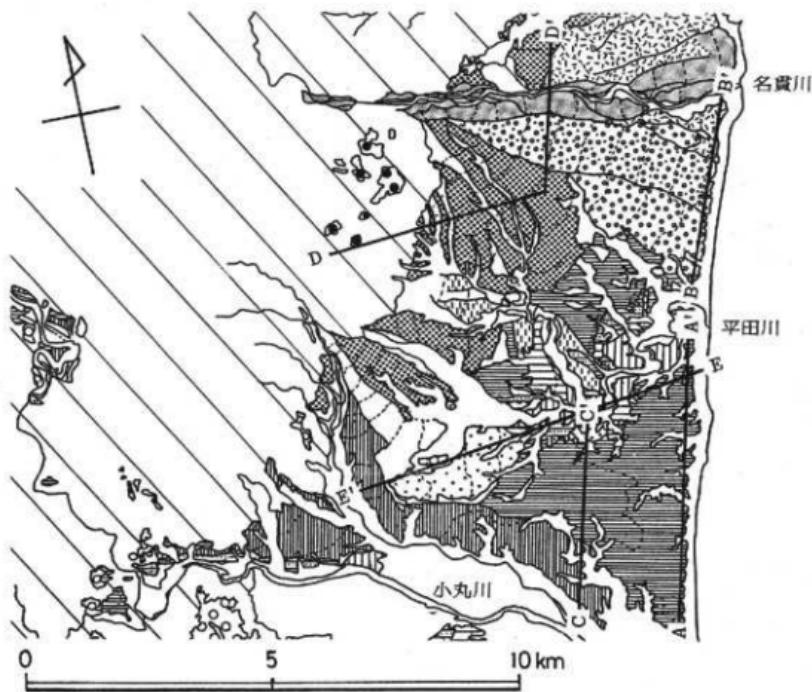
1. 中田篤也 「尾鈴山酸性岩の地質」（『地質学雑誌』Vol. 84, No. 5)
P. 243-256 1978年



第1図

通浜付近の火山灰柱状図

2. 首藤次男 「宮崎層群の地史学的研究」 (『九大理学部研究報告 地質』 Vol. 4)
P 1~40 1952年
3. 町田洋, 新井房夫 「広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—」
(『科学』 46) P 339~347 1976年
4. 町田洋, 新井房夫 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域ラフラー・アカホヤ火山灰—」
(『第四紀研究』 17) P 143~163 1978年

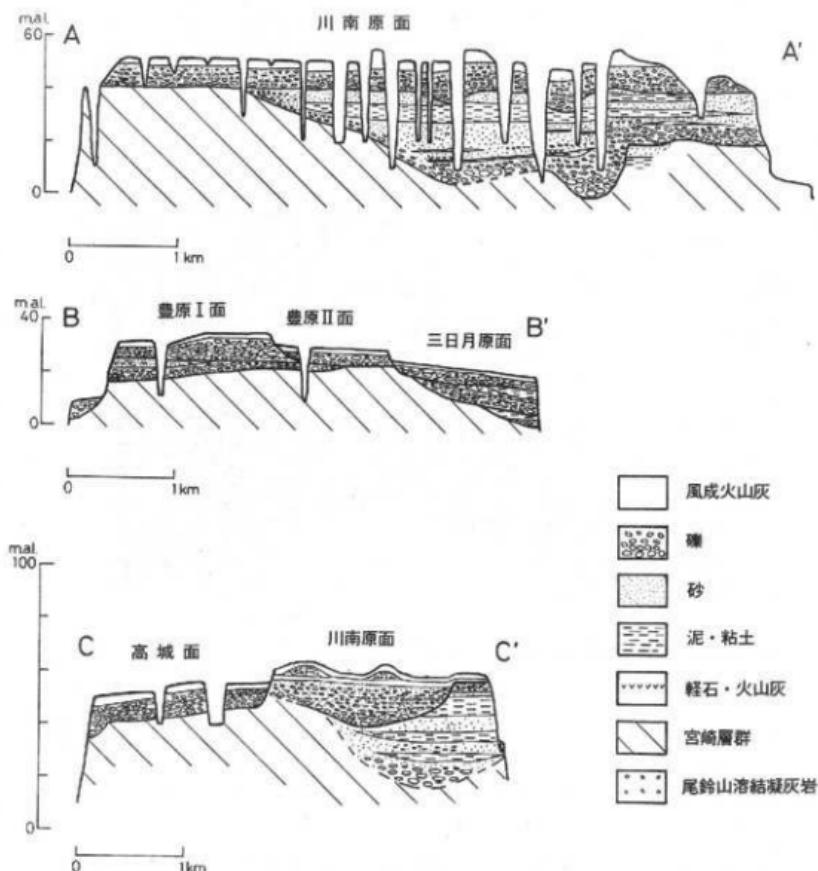


1. ● 2. ○ 3. · 4. ■ 5. ▒ 6. ■■ 7. □□ 8. □□□ 9. □□□□

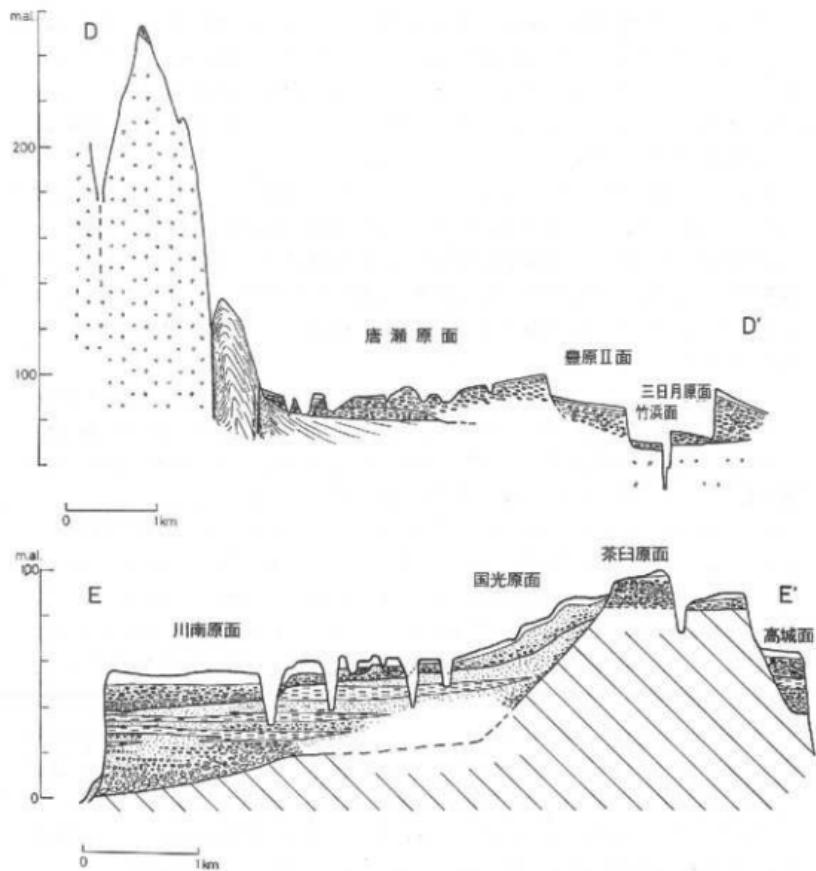
10. □□□□ 11. ▒▒ 12. ▒ 13. □□□ 14. ▒▒ 15. □□□□ 16. □ 17. ▒

- 1. 青鹿面
- 2. 茶臼原面
- 3. 国光原面
- 4. 唐瀬原面
- 5. 川南原面
- 6. 高城面
- 7. 豊原Ⅰ面
- 8. 豊原Ⅱ面
- 9. 常磐面
- 10. 平田面
- 11. 平田面
- 12. 13. 三日月原Ⅰ, Ⅱ面
- 14. 伊倉面
- 15. 竹浜面

第2図 川南町周辺の地形面区分図



第3図 地形・地質断面図(I)



第4図 地形・地質断面図(II)

2. 川南町の歴史的環境

川南町の地形は、1で述べられているように山地とその東麓から海岸にかけて広がる平坦な段丘の二つに分けられ、各時代の遺跡は段丘上に多く分布する。

旧石器時代の遺跡の発掘調査は行なわれていないが、大野寅男氏による精力的な踏査によつて白鶴遺跡（ナイフ形石器・細石核）、番野地C遺跡（尖頭器・細石核・剝片）、旭ヶ丘遺跡（尖頭器）、椎原遺跡（尖頭器・細石核・剝片）、大久保（通山）遺跡（細石核・ナイフ形石器）^{註1}の5ヶ所が知られていた。今回の分布調査によって新たに谷ノ口遺跡（細石核）、住吉B遺跡（細石核）、卒手遺跡（尖頭器）、樅風呂遺跡（石刃）の4ヶ所が追加された。遺跡は山地及び山麓に形成されている。

縄文時代の遺跡も発掘調査は行なわれていないが、今回の調査によって60ヶ所の遺跡が確認された。早期の山形押型文・楮円押型文土器が、住吉B遺跡・丸山西原遺跡・旭ヶ丘遺跡・松ヶ迫遺跡・野田原遺跡・大久保遺跡等で確認され、込ノ口遺跡・旭ヶ丘遺跡・霧島遺跡・虚空藏免遺跡・大迫遺跡・丸山遺跡・丸山西原遺跡では焼石及び共伴土器によって集石遺構の存在が推定される。前・中・後・晚期の良好な遺跡は確認されなかった。遺跡は山地及び山麓に形成されている。

弥生時代の前期・中期の遺跡の発掘調査は行なわれていない。前期の遺跡・遺物は未発見であるが、中期の遺跡・遺物に関しては刻目突帯を有する下城式の壺の口縁や逆L字口縁の壺の口縁を出土する下ノ原遺跡、下城式の壺の口縁を出土する赤石遺跡・前原B遺跡・鋤先口縁の壺を出土する萌牟川遺跡がある。中期の遺跡は山麓の縁辺部に立地している。

後期の遺跡としては、瀬之口伝九郎・橋渡正男氏によって東九州の安国寺式の櫛波波状文を有する壺・高环等を出土する鍛治別府・形山上・十文字・唐潮・沓袋・下垂門が挙げられて^{註2}いる。昭和29年に把吉田遺跡の発掘調査によって不定形プランの住居跡が2軒検出され、壺・壺等の後期の弥生土器と併し方形石庖丁等が出土している。昭和53年には中ノ迫A遺跡の発掘調査によって5m×4.6mの方形プランの住居跡が検出され、壺・壺・高环等の後期の弥生土器と併し方形石庖丁・土製勾玉等が出土している。^{註3}昭和55年に東平下1号円形周溝墓、昭和56年には東平下2号方形周溝墓が調査され、石開い木棺を内部主体とする直徑15.5mの円形周溝墓から直刀と壺・壺・高环・鉢形土器・組合せ式木棺を内部主体とする一辺15mの方形周溝墓から壺・壺形土器が出土した。この2基の周溝墓は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての日向における古墳出現前夜の墓制として注目される。東平下周溝墓群を造営した集落跡は未確認である。後期の集落跡は、標高80m～110mの緩やかな舌状台地に立地するAグループ（丸山西原遺跡・大迫遺跡・中ノ迫A遺跡）、標高80mの台地の中央部に立地するBグループ（香印原遺跡・弥次郎遺跡・把吉田遺跡）、台地縁辺部に立地するCグループ（前原B遺跡・尾花B遺跡）に分けられる。特に大迫遺跡は、住居跡40余軒、周溝墓3基確認されているので、当地域の拠点集落であり、川南古墳群を造営する前段階の母体である。

古墳時代の遺跡としては川南古墳群に代表される。川南古墳群は、小丸川を見おろす標高約60mの左岸台地に位置し、前方後円墳25基、方墳1基、円墳25基で構成されている。前方後円

墳の占める割合が、西都原古墳群の29基（計309基）、新田原古墳群の23基（計206基）、本庄古墳群の16基（計57基）、南方古墳群の6基（計42基）に比較すると高い上に、分布地域は狭い。盟主的な位置を占めるのは全長112m、後円部径63m、同高10.6m、前方部幅32m、同高4.6mの大塚（39号墳）で、東西に20~30m級の小型の前方後円墳5基を從属させている。立地によって5グループに分かれる。過去において12号墳（円墳）と33号墳（前方後円墳）から円筒埴輪、国光塚（円墳）の石室から鉄劍・金環・土師器、天龍梅塚（円墳）から勾玉・管玉^{註7}・金環、山石塚から冠が出土している。また蟻別府の横穴式石室を内部主体とする円墳から腰玉勾玉1、須恵器の蓋坏2が出土している。特に国光塚の横穴式石室は須恵器が出土しておらず、県内において20数例確認されている石室の中では古式に属すると考えられる。昭和57年11月に全長27mの21号墳（前方後円墳）の規模の確認調査を行なった際に東北方向に10m離れた地点で直径13mの円形周溝が検出され、周溝から小田富士雄氏編年^{註8}の第Ⅱ期の躰が出土した。この円形周溝は円墳が削平された痕跡である。川南古墳群の時期は、39号墳・11号墳を初現とする5世紀から30号墳の6世紀に當選された古墳群である。川南古墳群以外では唯一の前方後円墳である狐塚（55号墳）の西の円墳から小田富士雄氏編年^{註9}の第Ⅰ期の両耳付の無蓋高杯が出土しているのは注目される。横穴墓、地下式横穴墓が墓制として採用されていない地域でもある。

歴史時代の遺跡については、上垂門の奈良期の藏骨器を伴なう火葬墓や奈良原の供養塔等が^{註10}知られている程度である。当方は、古代には韓家郷の一部に比定され、韓人（渡来人）との関係を思わせる所であり、また去飛（都農町）の駅と兎湯（木城町高城）の駅を結ぶ古代の幹線道も想定される。また字名に「別府」等の地名が数多く残っており、中世の莊園関係の遺跡が存在する可能性がある。寺跡としては、「日向地誌」に牟手寺址、海藏寺址、觀音寺址が記されているが、寺域としてはまだ確認されていない状況である。

このように、歴史時代（古代～近世）にかけての遺跡は数も少なく、今後文献史料とも併せて、確認していく必要がある。

（長津宗重）

註

- (1) 茂山満・大野寅男「兎湯郡下の旧石器」（『宮崎考古』第3号） 1977年
- (2) 茂山満「吐原型細石核-大野寅男採集石器集成(1)-」（『宮崎考古』第6号） 1980年
- (3) 濑之内弘久郎・橋渡正男「日向川南村に於ける弥生式土器」（『考古学雑誌』34巻8号） 1944年
- (4) 石川恒太郎「川南町把吉田遺跡」（『宮崎県文化財調査報告書』第3編） 1958年
- (5) 日高正晴「川南町東平下の円形周溝墓について」（『宮崎考古』第6号） 1980年
- (6) 第11回埋蔵文化財研究会「西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題」 1981年
- (7) 地元の人からの聞き取り調査。
- (8) 昭和56年表抜。時期の決定できる程の破片ではないが、6世紀代のものである。

- 19-01 田代勝「先住民遺跡考（山根城遺跡台地）」 1976年
- 02 本村家昌「古墳時代の基礎研究編—資料篇(1)」（『東京国立博物館紀要』第162号） 1991年
- 03 小日向土雄「九州の遺跡学序説」（『九州考古誌』22号） 1964年
- 八女市教育委員会「八女古墳群調査報告」 1～2 1969年～1972年
- 05 面高町第「面高町跡見の天孫宮」（『宮崎考古』第6・12号） 1980年
- 06 宮崎県教育委員会「宮崎県の文化財」 1982年
- 08 久川昌吉・日高重季「古代周史」 1980年

II 埋蔵文化財包蔵地地名表

川南地区 1001～

平田地区 2001～

1. 番号は、地図の番号と一致している。

2. 旧番号のうち「地図」は昭和52年度刊行の文化庁『全国遺跡地図（宮崎県）』の遺跡番号、「台帳」は昭和38・49・51年度に作成した『宮崎県遺跡台帳』の遺跡番号です。

第三章 资本主义的金融化

一、金融化——“新自由主义”

二、金融化——“新保守主义”

金融化是资本主义发展到一定阶段的产物。在资本主义发展的不同阶段，金融资本的作用和地位是不同的。在自由竞争阶段，金融资本的作用不大，金融资本家的地位也不高。在帝国主义阶段，金融资本的作用越来越大，金融资本家的地位也大大提高。

金融化是资本主义发展到一定阶段的产物。在资本主义发展的不同阶段，金融资本的作用和地位是不同的。在自由竞争阶段，金融资本的作用不大，金融资本家的地位也不高。在帝国主义阶段，金融资本的作用越来越大，金融资本家的地位也大大提高。

金融化是资本主义发展到一定阶段的产物。在资本主义发展的不同阶段，金融资本的作用和地位是不同的。在自由竞争阶段，金融资本的作用不大，金融资本家的地位也不高。在帝国主义阶段，金融资本的作用越来越大，金融资本家的地位也大大提高。

金融化是资本主义发展到一定阶段的产物。在资本主义发展的不同阶段，金融资本的作用和地位是不同的。在自由竞争阶段，金融资本的作用不大，金融资本家的地位也不高。在帝国主义阶段，金融资本的作用越来越大，金融资本家的地位也大大提高。

金融化是资本主义发展到一定阶段的产物。在资本主义发展的不同阶段，金融资本的作用和地位是不同的。在自由竞争阶段，金融资本的作用不大，金融资本家的地位也不高。在帝国主义阶段，金融资本的作用越来越大，金融资本家的地位也大大提高。

金融化是资本主义发展到一定阶段的产物。在资本主义发展的不同阶段，金融资本的作用和地位是不同的。在自由竞争阶段，金融资本的作用不大，金融资本家的地位也不高。在帝国主义阶段，金融资本的作用越来越大，金融资本家的地位也大大提高。

川南地区 1001~1118

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧番号		文 献	備 考
					地図	台帳		
1001	川南古墳群	大字川南字西ノ別府ほか	古 墓	古 墓			1・8・12 -19	昭36.2.25 国指定

(分類)

1・2・4	大字川南字国光	前方後円1・円2		
3・6~27・29~35・ 41・43~45	大字川南字西ノ別府	前方後円15・円16・方1		17・44号消滅
5	大字川南字蟻ノ別府	円1		19
28	大字川南字西ノ別府下	前方後円1		
36~40・42	大字川南字地藏谷	前方後円5・円1		
46~50・56	大字川南字上ノ原	前方後円2・円4		56号未指定
51~54	大字川南字北原	円1		52・53・54号消滅
55	大字川南字上ノ原北分	前方後円1		

1002	川南村古墳	大字川南字北原ほか	古 墓	古 墓				昭34.1.27 未指定
------	-------	-----------	-----	-----	--	--	--	-----------------

(分類)

1・2	大字川南字上ノ原北分		1・2号消滅
3~10	大字川南字北原	円1	3~5・7~10号消滅

1003	孫谷南遺跡	大字川南字孫谷南・孫谷	散布地	縄文~弥生		979		
1004	孫谷遺跡	大字川南字孫谷・古坂	散布地	弥 生				
1005	古坂遺跡	大字川南字古坂	散布地	縄文~古墳				
1006	番匠A遺跡	大字川南字番匠	散布地	縄文~弥生		978		
1007	番匠B遺跡	大字川南字番匠	散布地	弥生~古墳				
1008	西原遺跡	大字川南字西原・黒崎村上	散布地	縄文~弥生				
1009	小迫遺跡	大字川南字小迫	散布地	弥 生	13-26		13	
1010	向原A遺跡	大字川南字向原・鶴ヶ別府	散布地	縄文~弥生		972		
1011	塙付遺跡	大字川南字塙付・住田・東原	散布地	縄文~弥生			8	
1012	向原B遺跡	大字川南字向原・昭和	散布地	縄文~弥生				
1013	昭和遺跡	大字川南字昭和	散布地	弥 生				
1014	明原遺跡	大字川南字明原・昭和	散布地	弥 生				
1015	下肥A遺跡	大字川南字下肥	散布地	縄 文				
1016	大猪久保遺跡	大字川南字大猪久保・岩下	散布地	弥 生				
1017	下肥B遺跡	大字川南字下肥	散布地	弥 生				
1018	大塚山遺跡	大字川南字大塚山・中猪久保	散布地	縄文~古墳			8	

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地図	台帳		
1019	孫衛門遺跡	大字川南字孫衛門	散布地	弥 生	13-23		4・8・13	
1020	下ノ原遺跡	大字川南字下ノ原・形山下	散布地	縄文～弥生			4・8・11	
1021	形山上遺跡	大字川南字形山上・東平下	散布地	縄文～古墳		976	4・8・11	
1022	寺尾敷遺跡	大字川南字寺尾敷・下ノ原上	散布地	弥 生				
1023	上ノ原北分A遺跡	大字川南字上ノ原北分	散布地	弥生～古墳				
1024	古場山遺跡	大字川南字古場山・竹浜・孤塚下	散布地	弥 生	13-19		13	
1025	上ノ原北分B遺跡	大字川南字上ノ原北分	散布地	弥生～古墳		951		
1026	八幡遺跡	大字川南字八幡	散布地	弥 生			6	
1027	東平下A遺跡	大字川南字東平下	弥生時代墓地	縄文～弥生			16-21-22	昭55.3 沢内 昭56.3 沢内
1028	新耕原遺跡	大字川南字新耕原	散布地	弥 生		975	21	
1029	長岡原遺跡	大字川南字長岡原・番森原 上ノ原南分	散布地	弥 生				
1030	銀座遺跡	大字川南字銀座	散布地	弥 生				
1031	藏庄村遺跡	大字川南字藏庄村・明野	散布地	縄文～弥生				
1032	黒岩遺跡	大字川南字黒岩・明野・黒岩北	散布地	縄文～弥生			8	
1033	沓袋畠遺跡	大字川南字沓袋畠・前田	散布地	弥生～古墳	13-20		4・8・11 -13	
1034	込ノ口遺跡	大字川南字沓袋畠・村上	散布地	縄文～古墳			8	集 石
1035	村上A遺跡	大字川南字村上	散布地	縄文～弥生		952		
1036	乗越遺跡	大字川南字乗越	散布地	縄文～弥生		953		
1037	村上B遺跡	大字川南字村上・掛追中	散布地	縄文	12-3		13	
1038	南牧原遺跡	大字川南字南牧原	散布地	縄文～古墳		955		
1039	青鹿遺跡	大字川南字青鹿	散布地	縄文～弥生				
1040	旭ヶ丘遺跡	大字川南字旭ヶ丘・市納上	散布地	先土器～古墳		954	8・14	集 石
1041	山ノ口遺跡	大字川南字山ノ口	散布地	弥 生				
1042	谷ノ口遺跡	大字川南字谷ノ口・蟻ノ草	散布地	先土器～弥生				
1043	市納上遺跡	大字川南字市納上	散布地	縄文～弥生				
1044	山本遺跡	大字川南字山本	散布地	縄文～弥生		974		
1045	糸島遺跡	大字川南字糸島	集落跡	縄文～弥生				集 石
1046	葛掛原遺跡	大字川南字葛掛原	散布地	縄文～弥生				
1047	豊坂遺跡	大字川南字豊坂・葛掛原	墳 墓	縄文～弥生	13-22		13・21	
1048	香山原遺跡	大字川南字香田原・北唐瀬	集落跡	弥 生	13-21		13	
1049	道東遺跡	大字川南字道東・北麻瀬	散布地	弥生～古墳	13-25		1・6・8 -13	
1050	北原遺跡	大字川南字北原・道西	散布地	縄文～弥生				
1051	唐瀬東原遺跡	大字川南字唐瀬東原・道東	散布地	弥 生			4・6・11	

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地図	台帳		
1052	弥次郎遺跡	大字川南字弥次郎、葛掛原・豊坂 下唐瀬	集落跡	弥 生				
1053	下唐瀬遺跡	大字川南字下唐瀬	散布地	繩文～弥生				
1054	焼山遺跡	大字川南字焼山	散布地	弥 生				
1055	虚空藏免遺跡	大字川南字虚空藏面・難立	散布地	繩文～弥生			集 石	
1056	蟻立遺跡	大字川南字蟻立	散布地	繩文～弥生				
1057	椎原遺跡	大字川南字椎原	散布地	先上器～弥生	956	14		
1058	赤石遺跡	大字川南字赤石・鶴戸ノ本 境谷下	散布地	繩文～古墳	957			
1059	住吉A遺跡	大字川南字住吉	散布地	繩文～古墳				
1060	住吉B遺跡	大字川南字住吉	散布地	先上器～弥生	958			
1061	天神本遺跡	大字川南字天神本・赤石 鶴戸ノ本	散布地	繩文～弥生				
1062	丸山遺跡	大字川南字丸山・丸山西原	散布地	繩文～弥生			集 石	
1063	丸山西原遺跡	大字川南字丸山西原	集落跡	繩文～弥生	961	21	集 石	
1064	野田原遺跡	大字川南字北原	散布地	繩文～弥生	960			
1065	宮ノ原遺跡	大字川南字宮ノ原・井手ノ本	散布地	繩文～古墳				
1066	丸内遺跡	大字川南字丸内・丸尾	散布地	弥 生		8		
1067	丸尾遺跡	大字川南字丸尾・綿打上	散布地	弥 生				
1068	白鬱原遺跡	大字川南字白鬱原・西ヶ谷	散布地	繩文～弥生				
1069	萱根遺跡	大字川南字萱根	散布地	弥 生				
1070	龍ヶ脇遺跡	大字川南字龍ヶ脇・白鬱	散布地	繩文～弥生				
1071	白鬱遺跡	大字川南字白鬱	散布地	先土器～古墳	12-9	8-13-14 -15		
1072	萩原A遺跡	大字川南字萩原	散布地	繩文～古墳				
1073	萩原B遺跡	大字川南字萩原	散布地	繩文～弥生				
1074	火ノ口遺跡	大字川南字火ノ口・白鬱	散布地	繩文～古墳				
1075	下原遺跡	大字川南字下原・鬼松原・ 大久保原・金六松	古 墳	弥生～古墳				
1076	大久保原A遺跡	大字川南字大久保原	墳 墓	弥 生		21		
1077	大迫遺跡	大字川南字大迫・下東	集落跡	弥 生	12-10	13-21	集 石	
1078	中ノ迫A遺跡	大字川南字中ノ迫・綿打	集落跡	弥 生	959		昭53.8調査	
1079	中ノ迫B遺跡	大字川南字中ノ迫	散布地	弥 生				
1080	綿打上A遺跡	大字川南字綿打上	散布地	弥 生				
1081	綿打上B遺跡	大字川南字綿打上	散布地	弥 生				
1082	須田久保遺跡	大字川南字須田久保・中ノ迫	散布地	弥 生		8		
1083	松ヶ迫A遺跡	大字川南字松ヶ迫	散布地	繩文～弥生				
1084	松ヶ迫B遺跡	大字川南字松ヶ迫	散布地	繩文～弥生				

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地図	台帳		
1085	櫛風呂遺跡	大字川南字櫛風呂	散布地	先上器～古墳		962		
1086	山道遺跡	大字川南字山道・蛇ヶ谷沢・下原	散布地	弥 生				
1087	毘沙門遺跡	大字川南字北原・篠ヶ山	散布地	弥生～古墳		963		
1088	稚ヶ山遺跡	大字川南字稚ヶ山・北原	散布地	弥 生				
1089	蛇ヶ牟田遺跡	大字川南字蛇ヶ牟田	散布地	弥 生				
1090	中原遺跡	大字川南字中原・仲原・下原	散布地	縄文～弥生		965	8	
1091	新屋敷遺跡	大字川南字新屋敷	散布地	縄文～弥生				
1092	垂門遺跡	大字川南字垂門・大字平田字垂門	散布地	弥生～奈良	13-30		1-4-8 11-13-17 -18	
1093	番野地A遺跡	大字川南字番野地	散布地	弥 生	13-32	970	4-8-13	
1094	番野地B遺跡	大字川南字番野地	散布地	弥 生				
1095	東園光遺跡	大字川南字東園光・北河田	散布地	弥 生				
1096	把吉田遺跡	大字川南字把吉田	集落跡	弥 生	13-31		9-11-13	昭33.3調査
1097	前ノ田村遺跡	大字川南字前ノ田村南・西ノ田村西・西ノ田村北	散布地	弥 生	12-12	968	13	
1098	前ノ田村上遺跡	大字川南字前ノ田村上	散布地	弥 生		966		
1099	持ノ木遺跡	大字川南字持ノ木・前久保	散布地	縄文～弥生				
1100	前原A遺跡	大字川南字前原・持ノ木	散布地	弥生～古墳		967	4-8-11	
1101	前原B遺跡	大字川南字前原	集落跡	弥 生				
1102	湯追遺跡	大字川南字湯追・新湯追	散布地	縄文～古墳			4-8	
1103	新湯追遺跡	大字川南字新湯追・地蔵谷	散布地	縄文～古墳		969		
1104	西國光A遺跡	大字川南字西國光	散布地	弥 生				
1105	西國光B遺跡	大字川南字西國光	散布地	弥生～古墳	12-13	521	13	
1106	上ノ原遺跡	大字川南字上ノ原	散布地	弥生～古墳				
1107	國光塚古墳	大字川南字國光	古 墳	古 墳			12	
1108	天神前遺跡	大字川南字天神前・織田府・國光	散布地	弥生～古墳				
1109	尾花 A 遺跡	大字川南字尾花坂上・尾花西平	散布地	弥生～古墳				
1110	尾花 B 遺跡	大字川南字尾花坂上・尾花坂平	古墳・集落跡	弥生～古墳				
1111	勝司ヶ別所遺跡	大字川南字勝司ヶ別所・勝司ヶ別所南・鬼ヶ久保	散布地	弥生～古墳	16-14		13	
1112	鬼ヶ久保遺跡	大字川南字鬼ヶ久保	散布地	弥生～古墳				
1113	祝子塚遺跡	大字川南字下原	散布地	弥 生		964	8	
1114	光遺跡	大字川南字光・啗和	散布地	弥 生		973		
1115	東平下B遺跡	大字川南字東平下	散布地	弥 生		977		
1116	大久保原B遺跡	大字川南字大久保原	散布地	弥 生	12-11		13	
1117	尾花塚古墳	大字川南字尾花坂上	古 墳	古 墳				

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地図	台帳		
1118	番野地C遺跡	大字川南字番野地	散布地	先土器			14・15	

平田地区 2001~2026

2001	川南村古墳	大字平田字大久保ほか	古 墓	古墳・江戸			1・7	昭14.1.27 新指定
------	-------	------------	-----	-------	--	--	-----	-----------------

(号数)

11	大字平田字大久保	円1	江戸	1・7
12	大字平田字年ノ森	円1	古墳	1

2002	高下遺跡	大字平田字高下	散布地	弥 生				
2003	岩ノ下遺跡	大字平田字岩ノ下・ 大字川南字板廣瀬	散布地	弥 生				
2004	卒手遺跡	大字平田字卒手	散布地	先土器～古墳	13-29		8・13	
2005	鐵治屋敷遺跡	大字平田字鐵治屋敷・広野地	散布地	繩文～古墳			8	
2006	前牟山遺跡	大字平田字前牟田	散布地	繩文～弥生				
2007	狐毛遺跡	大字平田字狐毛	散布地	繩文～弥生			8	
2008	野縮尾遺跡	大字平田字野縮尾・岩坪	散布地	繩文～弥生			1・8	
2009	後牟田遺跡	大字平田字後牟田	散布地	繩文～古墳				
2010	仏坂A遺跡	大字平田字仏坂	散布地	弥生～古墳	13-27		4・8・13	
2011	白坂谷遺跡	大字平田字垂門	散布地	弥 生	980	8		
2012	大久保遺跡	大字平田字大久保	散布地	先土器～弥生			15	
2013	井手ノ上村遺跡	大字平田字井手ノ上村	散布地	繩文～弥生	13-33		1・8・13	
2014	大牟田遺跡	大字平田字大牟田・妻ノ木	散布地	繩文～弥生				
2015	伊弥ヶ谷遺跡	大字平田字伊弥ヶ谷	散布地	繩文～弥生				
2016	牧ノ内遺跡	大字平田字牧ノ内	散布地	弥 生				
2017	猫ヶ谷遺跡	大字平田字猫ヶ谷	散布地	繩文～弥生			8	
2018	南原A遺跡	大字平田字南原	散布地	繩文～弥生				
2019	南原B遺跡	大字平田字南原	散布地	弥 生				
2020	陰ノ木遺跡	大字平田字陰ノ木・猫ヶ谷	散布地	繩文～弥生				
2021	平鈴遺跡	大字平田字平鈴	散布地	弥 生				
2022	綱ヶ別府遺跡	大字平田字綱ヶ別府	散布地	弥 生			8	
2023	堤牟田遺跡	大字平田字堤牟田	散布地	弥生～古墳	971			
2024	仏坂B遺跡	大字平田字仏坂・宮ノ本 後牟田	散布地	弥 生	13-28		13	
2025	古場A遺跡	大字平田字古場	散布地	弥 生	13-34		8・13	
2026	古場B遺跡	大字平田字古場・妻ノ木	散布地	弥 生	13-35		8・13	

III 主要遺跡概説

1. 形山上遺跡 (1021)
2. 上ノ原北分日遺跡 (1025)
3. 東平下A遺跡 (周溝墓群) (1027)
4. 旭ヶ丘遺跡 (1040)
5. 霧島遺跡 (1045)
6. 赤石遺跡 (1058)
7. 住吉日遺跡 (1060)
8. 丸山西原遺跡 (1063)
9. 大内遺跡 (1066)
10. 萩原A遺跡 (1072)
11. 下原遺跡 (1075)
12. 大久保原A遺跡 (1076)
13. 大迫遺跡 (1077)
14. 中ノ迫A遺跡 (1078)
15. 川南古墳群 (1001)

かたやまかみ
1. 形山上遺跡 (1021) 大字川南字形山上・東平下

名貫川沿いの第2段丘上の平地に位置し、東西約1,200m、南北約250mの範囲の北縁を主な散布地とする遺跡である。付近は西に上ノ原北分遺跡、東に孫衛門遺跡、台地下第1段丘の下ノ原遺跡に接している。

今回の調査においては、石鉄・石匙・黒曜石剝片・繩文土器片・弥生土器片・須恵器片が採集されている。当遺跡出土の繩文土器(図版2)は、只般文を内外面に施した前期の上器と日殻条痕文を施した後、浅い沈線を施した後期の上器である。表掲した6本の打製石鎌のうち図示したのは、断面レンズ状のチャート製の四基式二等辺鎌と黒曜石製の四基式二等辺鎌である(図版4・23)。都農町一の宮神社蔵の壺(図版10)は平底気味の底部を有し、胴部は張り、器壁はハケ目を施す弥生後期の土器である。方形石庖(図版20)も表掲されている。

かみのはらきたわけ
2. 上ノ原北分B遺跡 (1025) 大字川南上ノ原北分・上ノ原南分・狐塚下

名貫川沿いの第2段丘の山麓近くの台地縁に位置する標高約105mの遺跡で、その中央に地元の人々が狐塚と呼ぶ国指定川南古墳群55号墳(前方後円墳)がある。狐塚の西の円墳で出土した須恵器の両耳付無蓋高杯(図版22・26)がある。杯部の底部は丸く、口縁部は若干外反気味に立ち上がり、口縁端部に明瞭な段を有する。断面三角形の2条の鋸い凸線の間に7条の櫛描波状文を施す。脚部は太く、外反気味になだらかに下方に開き、端部近くで明瞭な稜をなして垂直に下る。脚端部は若干甘く、五方に長方形の透孔を有する。胎土は精選され、焼成は堅緻で、色調は暗灰青色を呈する。器高12.6cm、環部径15.4cm、脚部径10.1cm、脚部高5.3cm。小田富士雄氏編年の第1期、陶邑編年の第1型式第4段階に相当し、5世紀後半の時期に比定される。県内の類例としては、東都原・生日古墳群・下北方第8号墳周溝出土の3例が知られている。町内の古式須恵器としては南牧原遺跡出土の第Ⅱ期の壺蓋、旭ヶ丘遺跡の鏡がある。

註

- (1) 小田富士雄 「九州の須恵器序説」(『九州考古学』22号) 1964年
- 八女市教育委員会 「八女古窯跡群調査報告」I~IV 1969年~1972年
- (2) 中村 浩 「陶邑」I~IV 1976年~1979年
- (3) 小田富士雄 「宮崎県児湯都東都原の高杯」(『九州考古学』14号) 1962年
- (4) 野間重孝 「生日古墳群内にみる古式須恵器」(『宮崎考古』第7号) 1981年
- (5) 野間重孝 「宮崎市下北方古墳群をめぐって」(『宮崎考古』第8号) 1982年

ひがしわらした
3. 東平下A遺跡(周溝墓群) (1027) 大字川南字東平下

東平下周溝墓群は、名貫川より南約1.6kmの通称、唐瀬原台地と呼ばれる第3段丘上の平地（標高約50m）に位置し、遺跡のすぐ北東は急斜面で東平下の集落がある平坦地との比高は約12mである。そして遺跡の南方には平地が広がっている。

昭和54年3月畑を耕作時に直径7m～15mの円形周溝墓5基と土塙墓8基、昭和55年3月には西に隔てた畑で円形周溝墓1基、方形周溝墓2基、土塙墓1基、南の畑では円形周溝墓2基、土塙墓1基が確認された（第5図）。

昭和55年2月に1号円形周溝墓、昭和56年3月には2号方形周溝墓（第6図）の発掘調査が実施され、石囲い木棺を内部主体とする直径15.5mの円形周溝墓から直刀と壺・甕・高環・鉢形土器（第8図）、組合式木棺を内部主体とする一辺15mの方形周溝墓からは壺・菱形土器（第7図）が出土した。1号周溝墓の裝飾高環（第8図）は、環部と脚部が浅く大きく外反し、口縁部に櫛描波状文を、脚部に竹管文を施している。類例が、安国寺遺跡（大分県）、多武尾遺跡（大分市）、右田一丁目遺跡（山口県）、土壙原北遺跡（愛媛県）、東奈良遺跡（茨木市）、七ツ塚1号墓（金沢市）等で出土している。2号周溝墓の壺（第7図）は、口縁部を若干内湾させ、櫛描波状文を施し、平底気味の底部を有する。この2基の周溝墓は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての日向における古墳出現前夜の墓制として注目される。

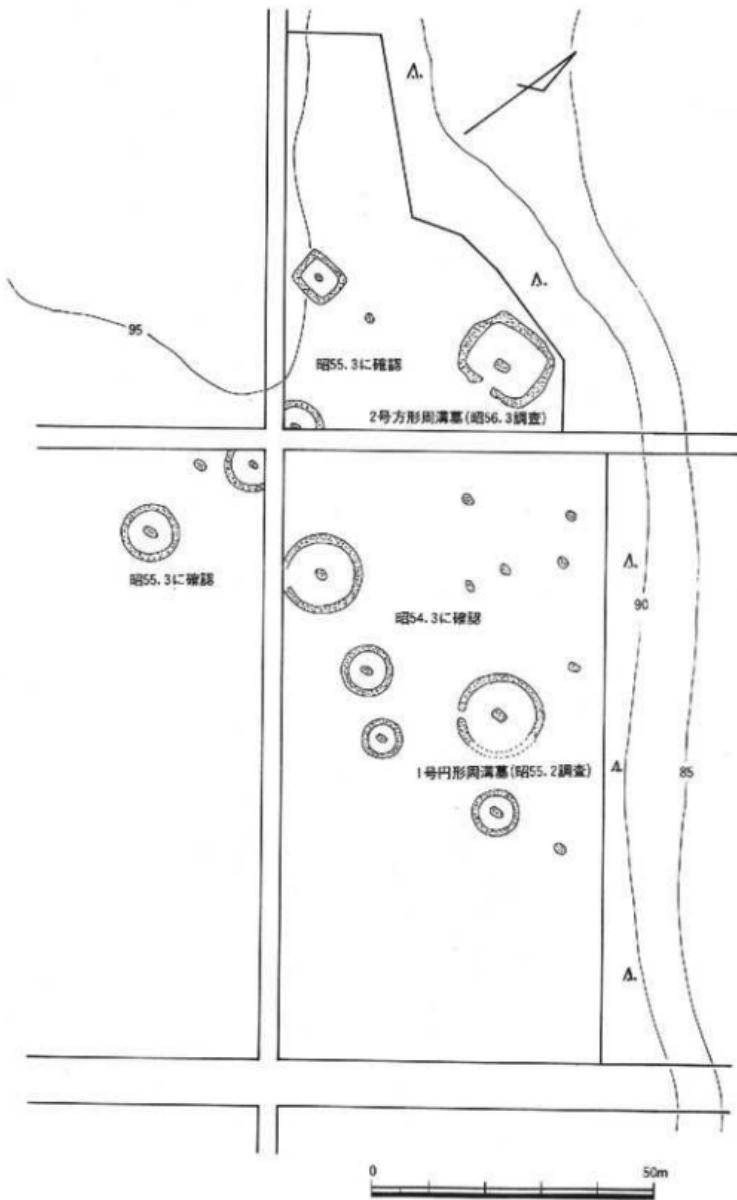
あさひがおか
4. 旭ヶ丘遺跡 (1040) 大字川南字旭ヶ丘・市納上

尾根上に長く南北へ約1km伸びた標高約230mの丘陵にあるこの遺跡は、西に半田川上流の深い谷となり青鹿ダムがある。東は川南平地を望む眺望の良い所でやや急斜面をなしている。この東斜面の各所から遺物が表揚されている。

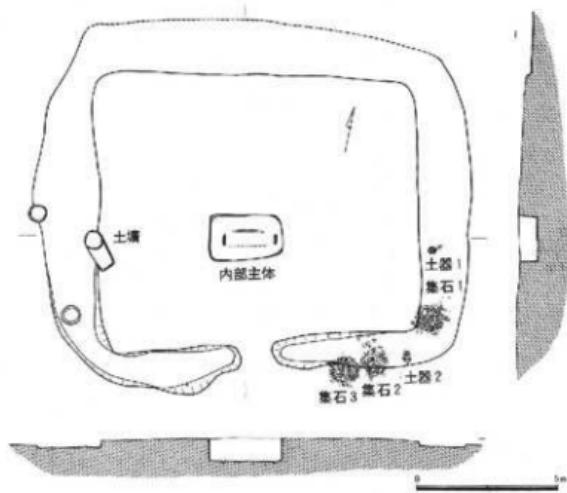
当遺跡出土の繩文土器（図版2）には、早期の山型押型文、樁円押型文、外面に貝殻条痕文を施した前期の「吉田式」の底部などがある。また貝殻腹縁を鋸歯状あるいは山形状に施文し、金雲母を胎土に含むタイプがあり、社遺跡の繩文土器Ⅱ類に相当する。⁽¹⁾また長さ10cm、幅5cmの打製石斧が1本、凹基式の打製石鎌（図版23）が8本表揚されている。須恵器の隙（図版23）は口縁部を欠き、胴部最大径12.6cmで、底部はヘラ削りを施す。小田富士雄氏編年の第Ⅰ期に相当する。

註

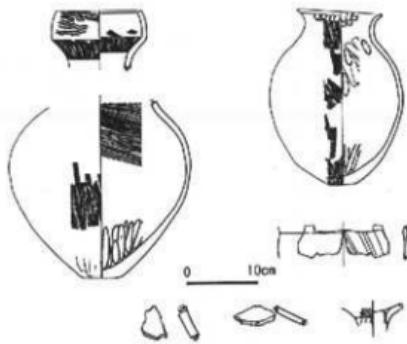
(1) 清武町教育委員会 「辻遺跡」 1980年



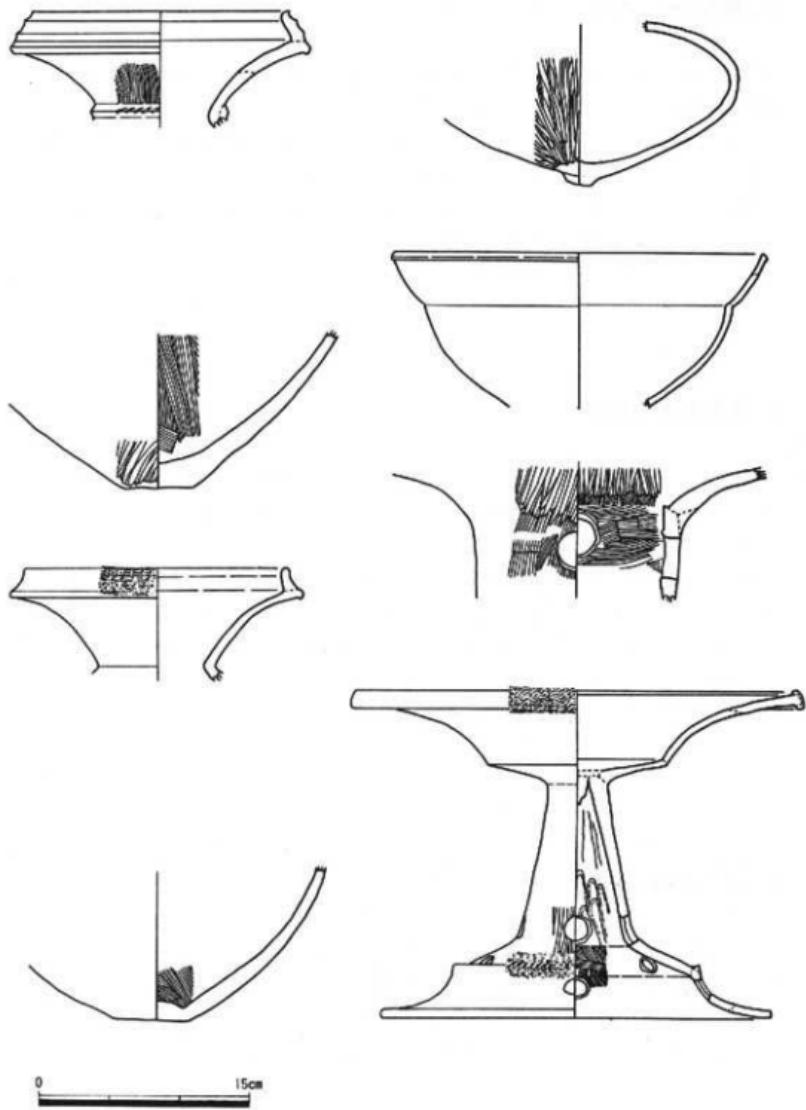
第5図 東平下A遺跡(周溝墓群)遺構分布図



第6図 東平下2号方形周溝墓遺構図



第7図 東平下2号方形周溝墓出土土器



第8図 東平下1号円形周溝墓出土土器

5. 霧島遺跡 (1045) 大字川南字霧島

登り口集落の東部を流れる小流と、西部を流れる小流が南下して、弥次郎川へ合流するまでの南北約1kmにわたる舌状台地に位置する遺跡である。

今回の調査で、登り口・妙章寺前の畑に住居跡3軒と径7mの円形周溝状遺構1基が耕作時に確認されるなど、この遺跡は、豊富な包蔵地であると考えられる。

当遺跡出土の打製石鎌（図版4・23）は、円基式で、肩部で一坦狭くなり、脚部は外側に円曲して張る。細かい調整でノコギリの刃状に全体を整形している。

6. 赤石遺跡 (1058) 大字川南字赤石・鳩戸ノ本・境谷下

平田川が深く切れ込んだ谷に青鹿ダムがあり、これを挟んで北東の台地上の旭ヶ丘遺跡と対峙し合う山腹にあるこの遺跡は、標高約130~240mで、遺跡の西に篠原川が流れ、川南平地を望む眺望の良い所である。

当遺跡からは早期の楮円押型文・貝殻文の縄文土器（図版3）、打製石鎌11、方形石庵丁2、磨製石鎌1、弥生土器（下城式）、勾玉等が表採されている。磨製石鎌（図版21・24）は、浅いえぐりの基部を有し、丁寧な研磨を施した長さ5.0cm、幅2.3cmの二等辺鎌である。方形石庵丁（図版20・24）は、長さ8.6cmと7.5cmで両端にえぐりを入れている。須恵器の有蓋高壺（図版22・26）は、小田富士雄氏編年の第ⅢB期に相当する。

7. 住吉B遺跡 (1060) 大字川南字住吉

尾鈴山麓の篠原川と小丸川支流の切原川に挟まれた南東に下る標高約150~220mの緩斜面の舌状台地に位置する遺跡である。北には住吉A遺跡があり、北東には赤石遺跡がある。ここで表採された縄文土器（図版3）には、早期の山形押型文・楮円押型文、貝殻糞痕文がある。長さ25.6cm、刃部幅8.8cm、厚さ3.0cmの磨製石斧（図版6・24）も出土している。

まるやまにしばる
8. 丸山西原遺跡 (1063) 大字川南字丸山西原

篠原川と半田川の間を西から東へ伸びる野田原台地で、その北側に位置する。付近には古墳10数基が散在していたが、現在は2基のみが残っている。

昭和52年2月、耕作時に11軒の住居跡と1基の円形周溝状遺構が確認され、完形に近い高環2、壺2、弥生土器片多数が出土した。昭和53年3月更にその東の畑からも円形周溝状遺構、昭和56年12月には方形周溝状遺構4基、円形周溝状遺構2基（第9図）を確認し、やはり周溝からは弥生土器が出上した。

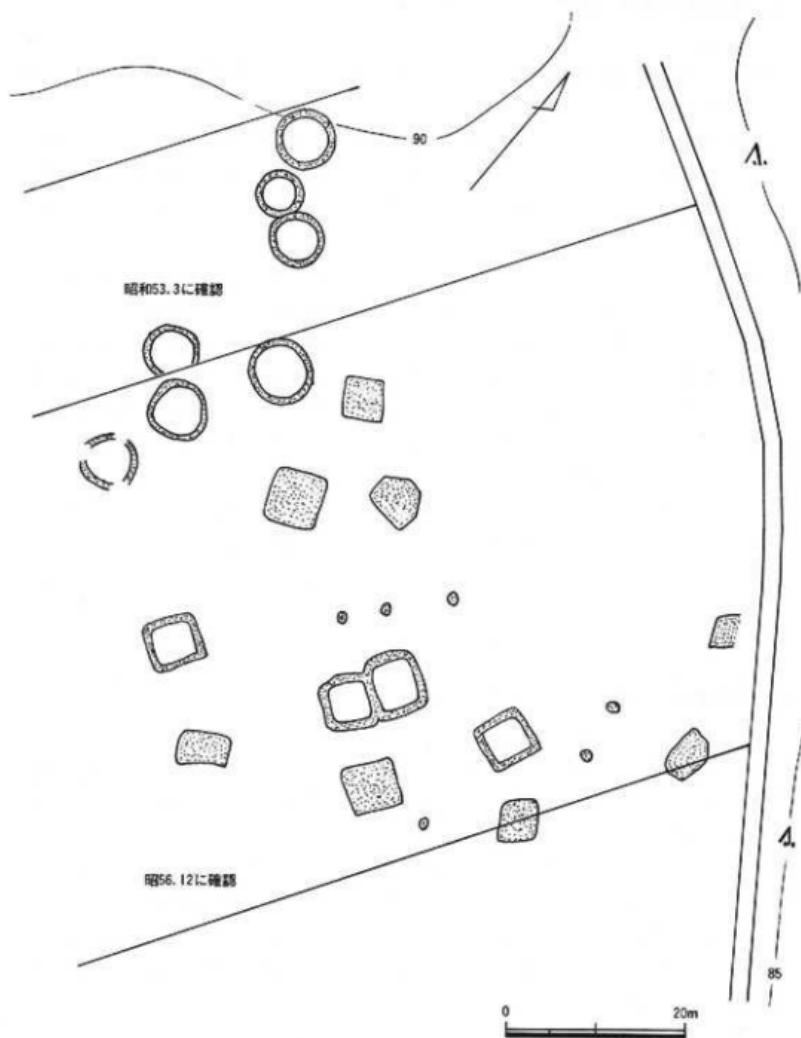
当遺跡出土の弥生土器（図版12・13・16・25）には、鉢・甕・壺・高環等がある。鉢には、口径17.5cm、器高11.0cm、胴部最大径13.2cmで、器面にヘラ磨きとハケ目を施した丸底の小型のタイプと、口径30.7cm、器高21.0cm、胴部最大径27.0cmで、器面にヘラ磨きとハケ目を施した平底の大型のタイプがある。甕は、くの字状に外反した口縁部を有し、口径15.4cm、器高17.5cm、胴部最大径14.2cmで、器面はハケ目を施し、平底である。高環は、環部径32.2cm、器高23.9cm、脚部径22.1cmで、環部の途中から11線部が大きく外反し、器面はヘラ磨きとハケ目を施している。弥生時代後期の土器である。

今回の分布調査で、焼石の散乱した畑より打製石器（図版23）、黒曜石片、早期の山形押型文土器（図版3）が表採されているので、集石遺構の存在が推定される。

おうち
9. 大内遺跡 (1066) 大字川南字大内・丸尾

この遺跡は山麓の山間にある。台地は、ここから南東に下る緩やかな平地となる。西側には切原川が流れる谷となり、平地東部の先端は標高約75m～115mの広い舌状台地となって大迫遺跡・中ノ迫遺跡がある。

当遺跡出土の弥生土器（図版13・25）には、所謂「赤江式」の鉢、口縁部に櫛描波文状を施した所謂「安国寺式」の甕等がある。鉢は、口径22.7cm、器高15.4cm、胴部最大径20.5cmで、大きく外反した口縁部と凸レンズ状の底部を有している。器面はヘラ削りとヘラ磨きを施している。壺は口径17.4cmで、口縁端部はほぼ直立気味に内湾し、頸部には刻み突帯を有する。土器によれば、当遺跡の時期は弥生時代後期に比定される。



第9図 九山西原遺跡遺構分布図

はきわら
10. 萩原A遺跡 (1072) 大字川南字萩原

山腹の舌状台地にこの遺跡はある。西は木城町岩戸原が近い。東すぐ下には切原川が流れる標高約150mの高地にあり、谷間には自然を利用した御池公園がある。

当遺跡出土の縄文土器(図版3)には、早期の山形押型文、内面貝殻条痕の口縁部がある。石器としては石錘等が出上している。

当遺跡は縄文時代の遺跡である。

しもばる
11. 下原遺跡 (1075) 大字川南字下原・星松原・金六松・大久保原

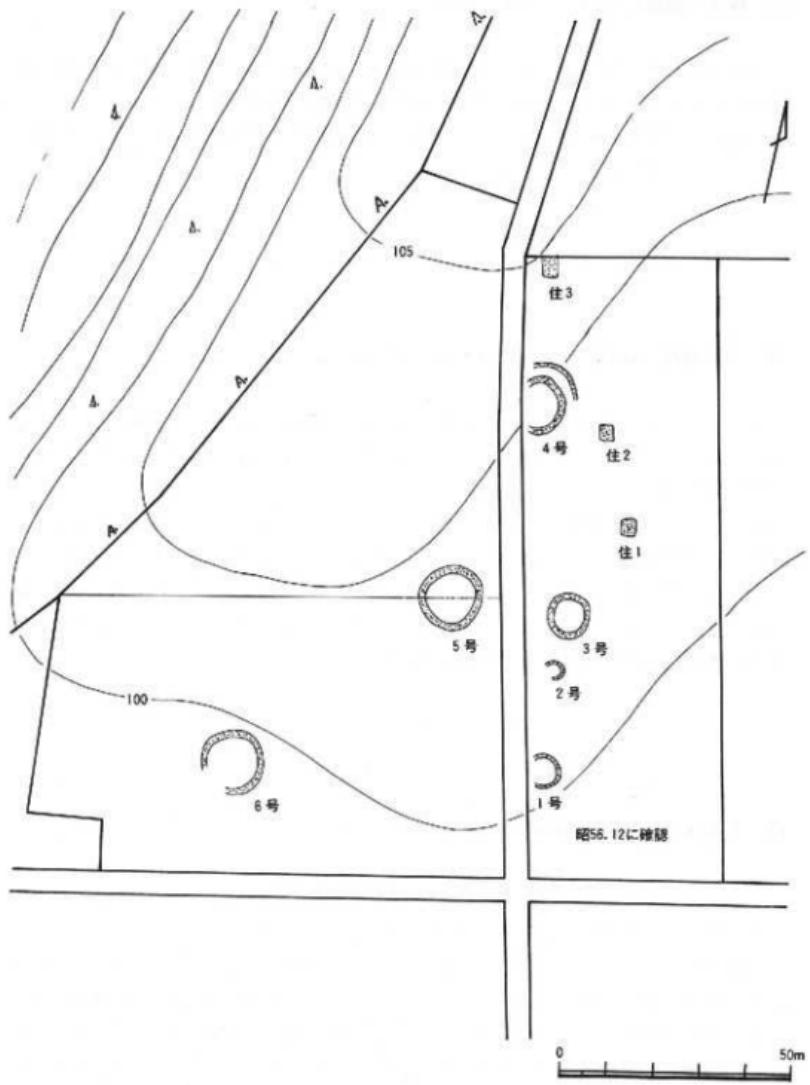
十文字平野がゆるやかに下る、その西縁の畠である。西方下は切原川へ急斜面をなし、川面より比高約45mの台地上に位置するところにこの遺跡はある。付近には、切原川を隔てて山腹に白鬚遺跡がある。

昭和56年12月30日、耕作時に直径14m、13m、12m、10m、4m、7mの6基の円形周溝と3軒の住居跡が確認された(第10図)。この円形周溝は、周溝より須恵器の破片が出土しているので、古墳の周溝と考えられ、特に最北端の大きな円形周溝は幅1.4m、0.7mの2本の周溝がめぐっている。出土した須恵器には壺・壇・提瓶などの器種があり、これらは小川富士雄氏編年の第ⅢB・ⅣA期に相当し、6世紀後半に比定される。

12. 大久保原A遺跡 (1076) 大字川南字大久保原

この遺跡は、北の台地上にある大迫遺跡と西の台地上にある下原遺跡の間の比高約20m下がった平地にある。耕作時に周溝蓋の周溝から弥生土器が出上した。

当遺跡出土の弥生土器(図版16・17・25)には、壺2、甕1がある。壺は、口縁部に櫛描波状文を施し、口縁部は外反した後、短い口縁端部が内済し、底部は平底である。口径13.8cm、器高38.6cm、胴部最大径29.2cm、器面にハケ目とヘラ削きを施す。甕の口縁部はくの字状に外反し、底部は平底状を呈し、器面にはハケ目を施す。口径23.6cm、器高31.0cm、胴部最大径24.8cmである。土器によれば、当遺跡の時期は弥生時代後期に比定される。



第10図 下原遺跡遺構分布図

おおきこ
13. 大迫遺跡 (1077) 大字川南字大迫・下東

山麓の大内集落より十文字の集落へ南東に下る緩やかな標高約80m～115mの舌状台地で、東には須田久保の池がある谷になっている。東西約200m、南北約1,200mの範囲の広い遺跡で、昭和17年頃より石鎚・摺石・石庵丁・土器などが出土し、中には炭化米の入った壺もあった。

昭和52年1月、耕作の際に30余軒の住居跡と2基（径6m）の円形周溝墓が確認され弥生時代後期の上器が多数出土した。また昭和57年9月には西に隣接した畑で耕作の際に11軒の住居跡と中央付近に5m×7mの方形周溝墓が確認された（第11図）。この他東の畑にも当集落が広がっていると推定される。当遺跡で出土した弥生土器（図版14・15・26）は、櫛描波状文を口縁部に施した後期の安国寺式系の壺を特徴として、櫛描波状文の文様構成も多種である。共伴する石庵丁（図版20・24）はすべて方形石庵丁であり、土錘・紡錘車（図版21）等も出土している。

更にこの東方約300mの台地上畑からは打製石鎚を共伴する集石遺構が確認されている。そのうちの1本の打製石鎚（図版5・23）は、凹基式の二等辺鎚で黒曜石製である。

当遺跡は弥生後期における当地域の拠点集落と考えられる。

なかのさこ
14. 中ノ迫A遺跡 (1078) 大字川南字中ノ迫・綿打

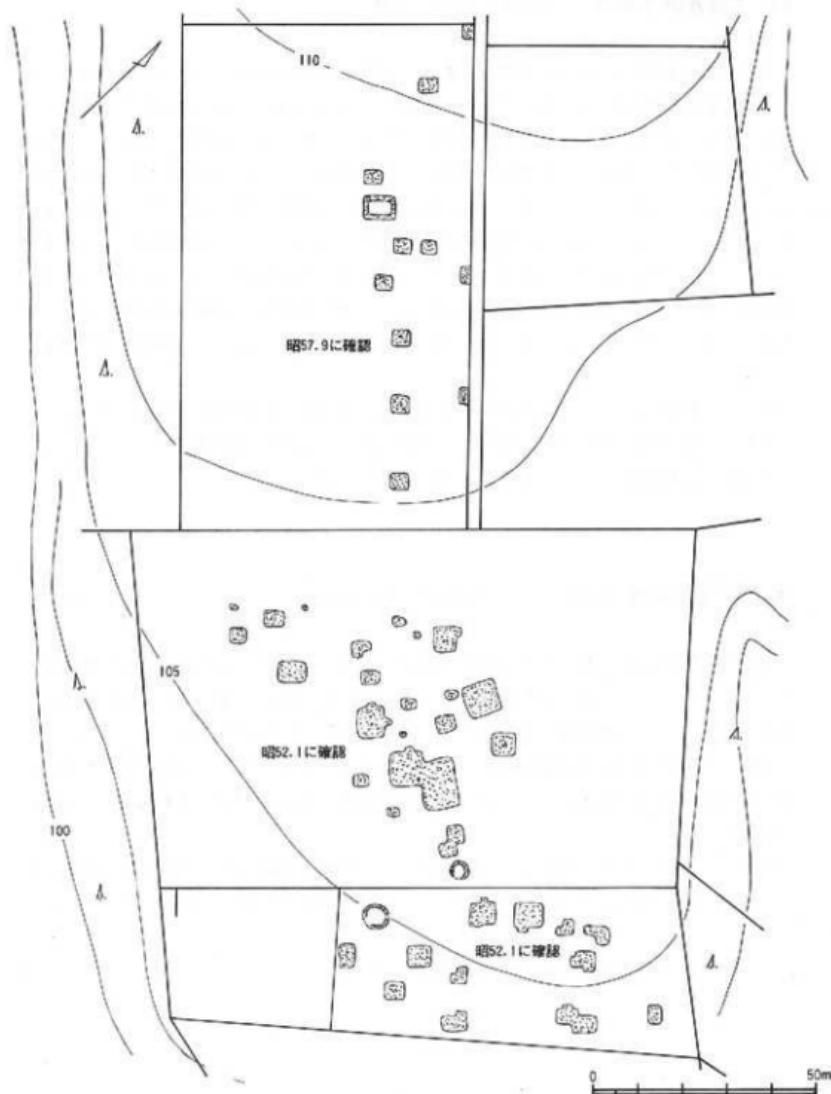
山麓大内の平坦面の台地より大迫遺跡に平行して南東にのびた緩やかな舌状台地、先端は小流で3方に分かれた中央部の台地上に位置する標高約75m～107mの遺跡である。遺跡は支流に挟まれており、その南緩斜面の山林の中からは多量の土器等が表採される。

平地の畑を昭和53年3月に県教育委員会が発掘調査を行ない、5m×4.6mの方形プランの住居跡が検出された。住居跡から弥生時代後期の壺・甕・高杯等の土器、方形石庵丁、土製勾玉等が出土している。⁽¹⁾

また、分布調査の際も、櫛描波状文を口縁部に施した複合口縁の壺や、口縁端部に櫛描波状文を施した高杯の破片が表採されているので、当遺跡は弥生時代後期の集落跡と考えられる。

註

(1) 「宮崎県文化財調査報告書」第27集に報告予定



第11図 大迫遺跡遺構分布図

15. 国指定史跡・川南古墳群（1001） 昭和36年2月25日指定

大字川南字西ノ別府・国光・地蔵谷・上ノ原北分

川南古墳群は、小丸川左岸の標高50～60mの台地縁に位置し、前方後円墳25基・方墳1基・円墳25基（消滅分も含む）で構成されている（第12図）。同じ台地縁で南東約3km離れて持田古墳群が存在する。

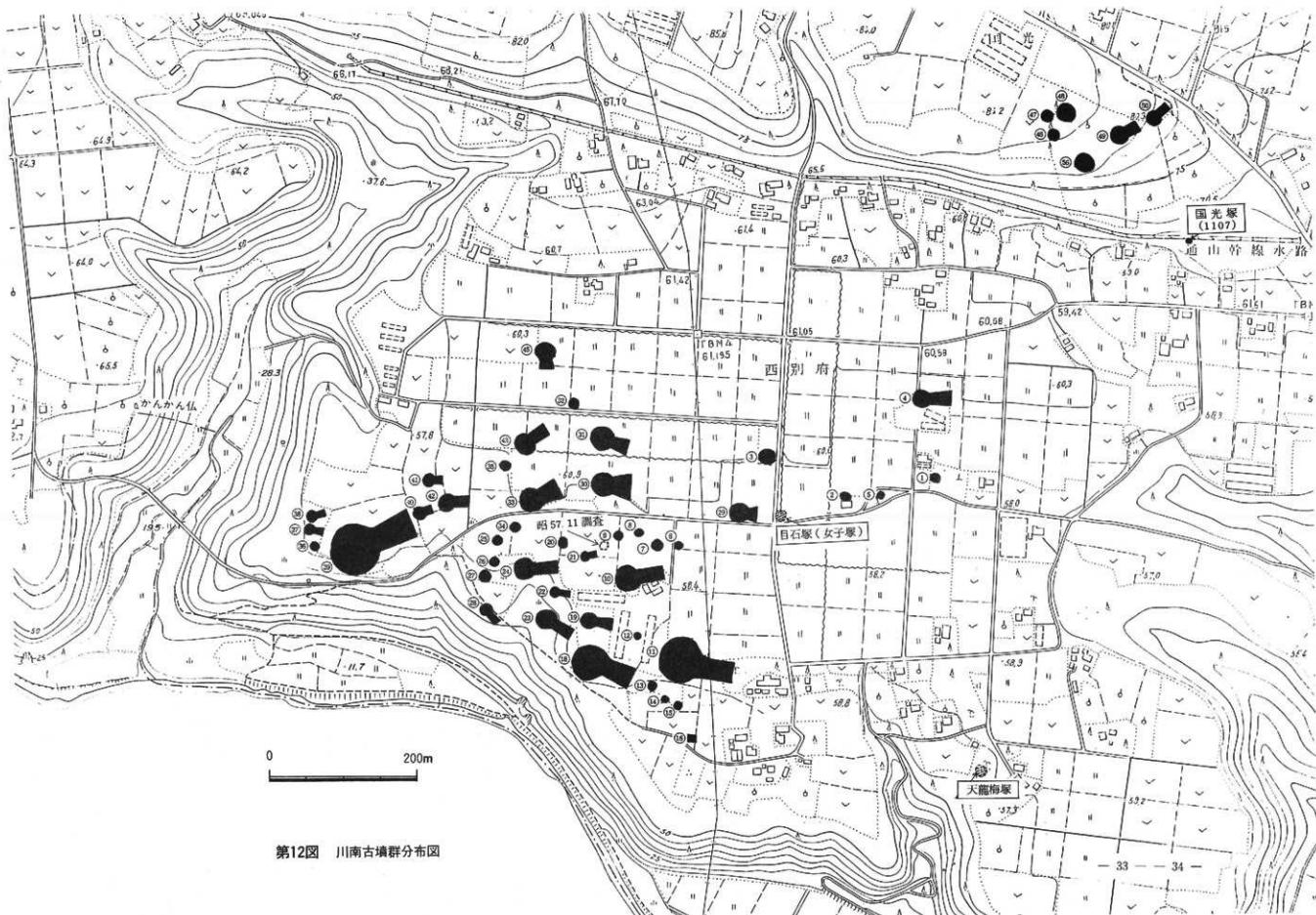
当古墳群は立地的に、小丸川を見おろす台地端部のグループと山手の前方後円墳2基・円墳4基で構成されたEグループ（46～50・56号墳）に分かれる。台地端部のグループは、直径10m級の小円墳群のDグループ（6～9・20・21・24～27・34号墳）を境にして、39号墳（主軸長112m）を中心として前方後円墳6基・円墳1基で構成されたA-1グループ（36～42号墳）、前方後円墳5基・円墳2基で構成されたA-2グループ（30～33・35・43・45号墳）、11号墳（100m）と18号墳（85m）を中心として前方後円墳9基・円墳4基・方墳1基で構成されたBグループ（10～16・18・19・21～24号墳）、前方後円墳2基・円墳5基で構成されたCグループ（1～5・29号墳）に分かれる。

Aグループの39号墳（112m）・Bグループの18号墳（85m）・11号墳（100m）が造営される段階→39号墳を意識しながら台地端部から中央部へ20～60m級の柄鏡式の前方後円墳が造営される段階→33号墳（55m）の造営される段階→30号墳（55m）造営される段階が想定される。帆立貝式の前方後円墳である45号墳（35m）は、主軸方向を従来の東西方向とは異なり南北方向にとっており、この段階に何らかの規制が働いたと考えられる。このことは29号墳（40m）にもあてはまる。当古墳群は、11・18・39号墳を除くと20～60m級の前方後円墳であり、Aグループの中では39号墳が突出して他と格差があるのに対してBグループは全体的に均整のとれた構成が行なわれている。Aグループ・Bグループが優位的に拮抗しあうのに対して、CグループとEグループは劣位的な位置にある。

過去において12号墳（円墳）と33号墳（前方後円墳）から円筒埴輪、国光塚（円墳）の石室から鉄剣・金環・土師器、天龍梅塚（円墳）から勾玉・管玉・金環、月石塚から冠、蟻別府の円墳の石室から勾玉・須恵器の蓋環、21号墳の東北方向の円墳の周溝から須恵器の鏡、55号墳の西の円墳から須恵器の両耳付の無蓋高壙の出土が知られている。当古墳群は、5世紀から6世紀にかけて造営された当地域の首長墓の墓域であると考えられる。

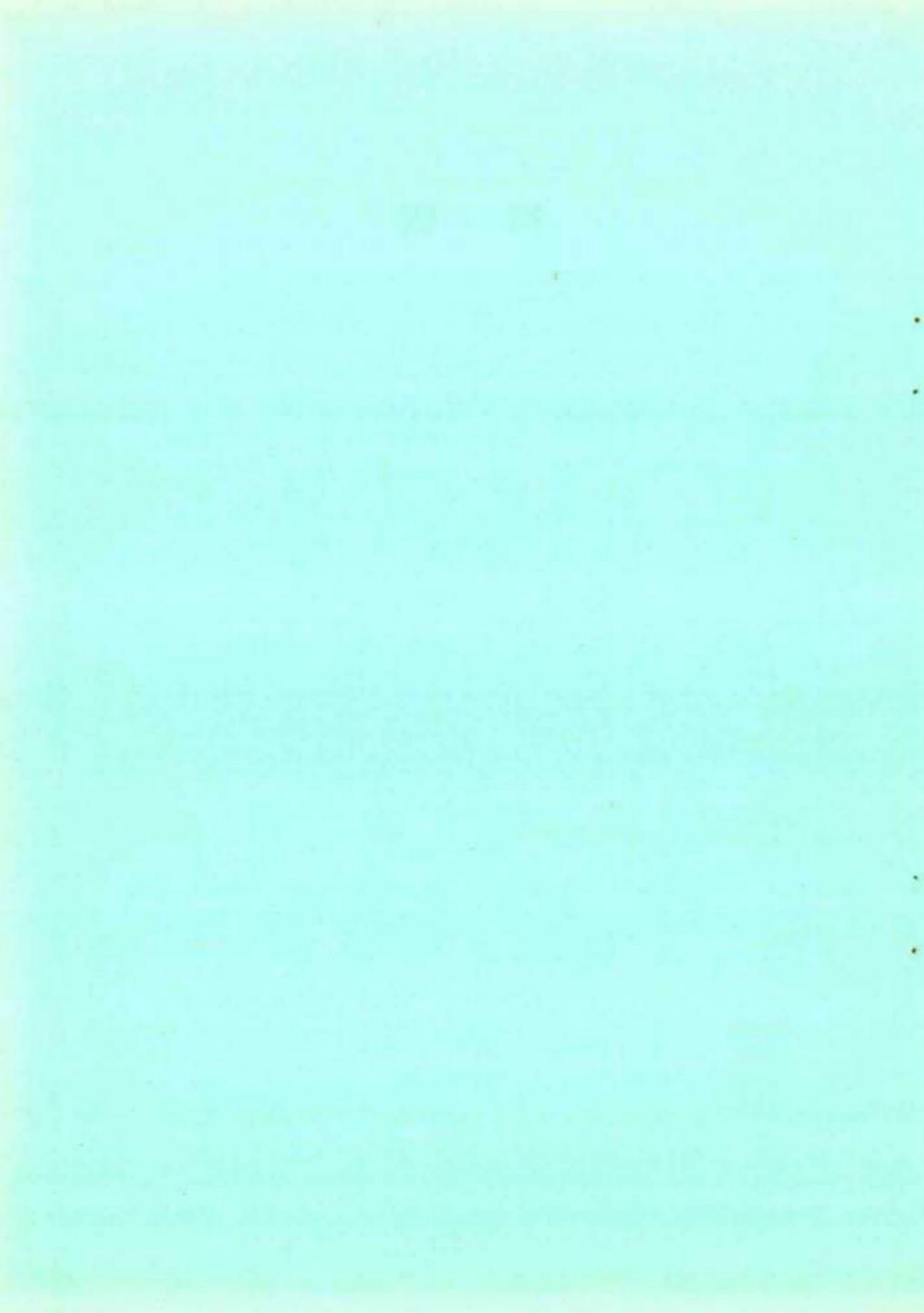
IV 川南町関連文献目録

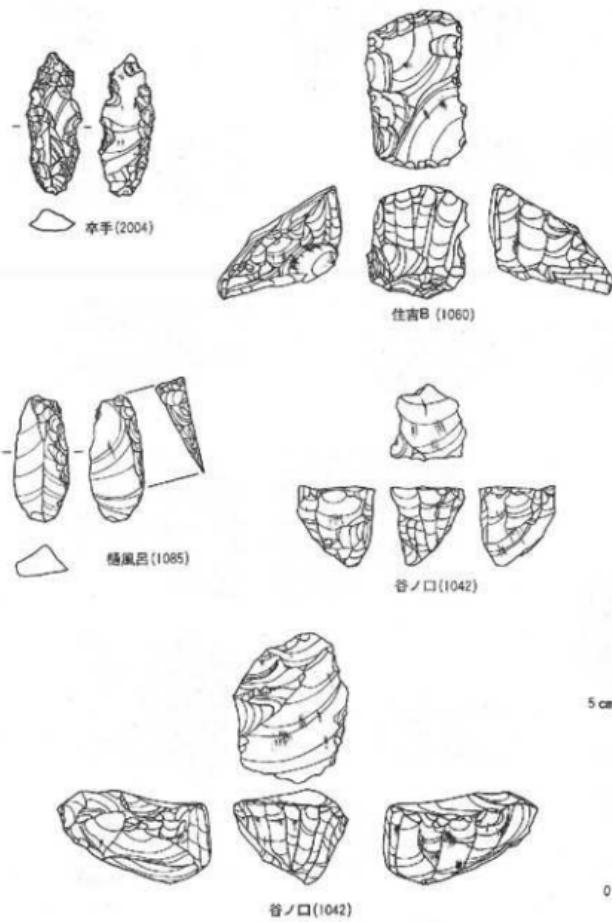
1. 宮崎県内務部 「宮崎県史類調査」 児湯郡之部 1925年
2. 平部崎南 「日向地誌」 1929年
3. 寺田貞吉, 日高重孝 「日向国史」 1930年
4. 潤之口傳九郎, 楠渡正男 「日向川南村に於ける弥生式土器」
(『考古学雑誌』34巻8号) 1944年
5. 日向上代研究所 「日向上代遺跡遺物地名表」 1944年
6. 日高重孝 「日向の遺跡遺物と傳承」 1953年
7. 日向郷上史料集研行会 「本萬実録卷之四」 (『日向郷上史資集』第6巻) 1954年
8. 田中熊雄 「宮崎県縄文弥生期考古遺物地名録」
(『宮崎県文化財調査報告書』第2輯) 1957年
9. 石川恒太郎 「川南町把合田遺跡」 (『宮崎県文化財調査報告書』第3輯) 1958年
10. 文化庁 「全国遺跡地図(宮崎県)」 1962年
11. 石川恒太郎 「宮崎県の考古学」 青川弘文館 1968年
12. 河野助 「先住民遺跡考(川南國光原台地)」 1976年
13. 文化庁 「全国遺跡地図(宮崎県)」 1977年
14. 茂山謙, 大野寅男 「児湯郡下の旧石器」 (『宮崎考古』第3号) 1977年
15. 茂山謙 「蛙原型網石核一大野寅男採集石器集成(1)~」
(『宮崎考古』第6号) 1980年
16. 日高正晴 「川南町東平下の円形周溝墓について」 (『宮崎考古』第6号) 1980年
17. 高橋哲郎 「川南町発見の火葬墓調査概報」 川南町教育委員会 1980年
18. 高橋哲郎 「川南町発見の火葬墓」 (『宮崎考古』第6号) 1980年
19. 本村豪章 「古墳時代の基礎研究稿—資料(1)~」
(『東京国立博物館紀要』第16号) 1981年
20. 第11回埋蔵文化財研究会 「西日本の方形周溝墓をめぐる諸問題」 1982年
21. 遠藤学 「川南町の周溝遺跡—発見の顛末と現況—」 (『宮崎考古』第8号) 1982年
22. 川南町教育委員会 「東平下周溝墓群—2号方形周溝墓—」
(『川南町文化財調査報告書』1) 1982年



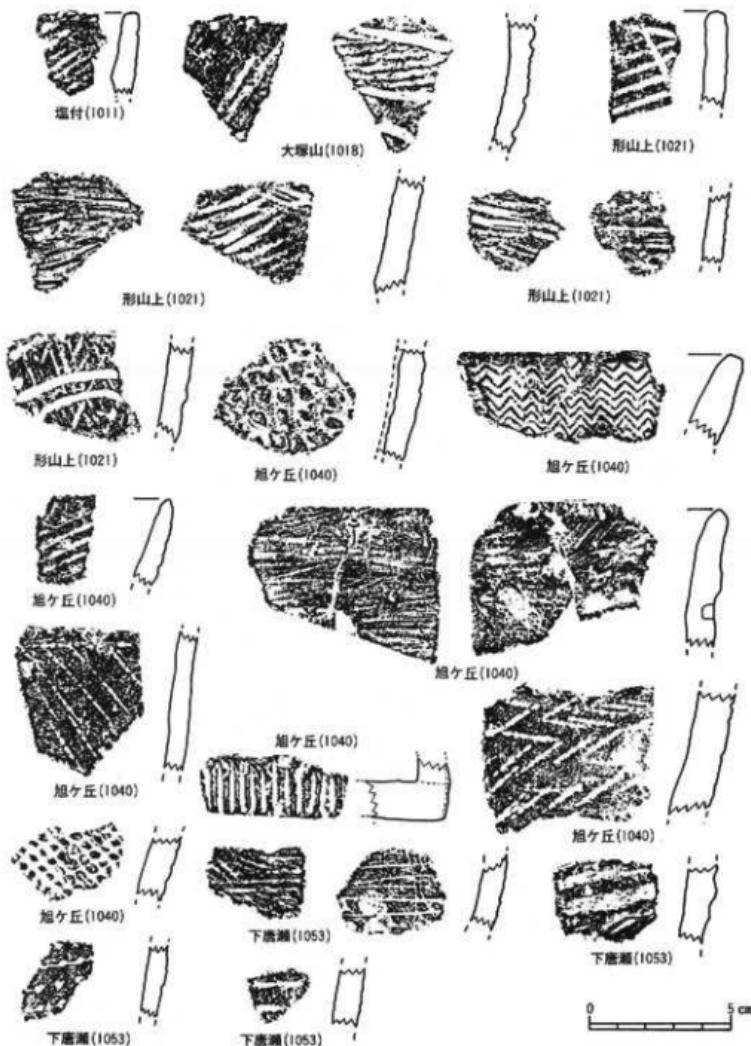
第12図 川南古墳群分布図

図 版

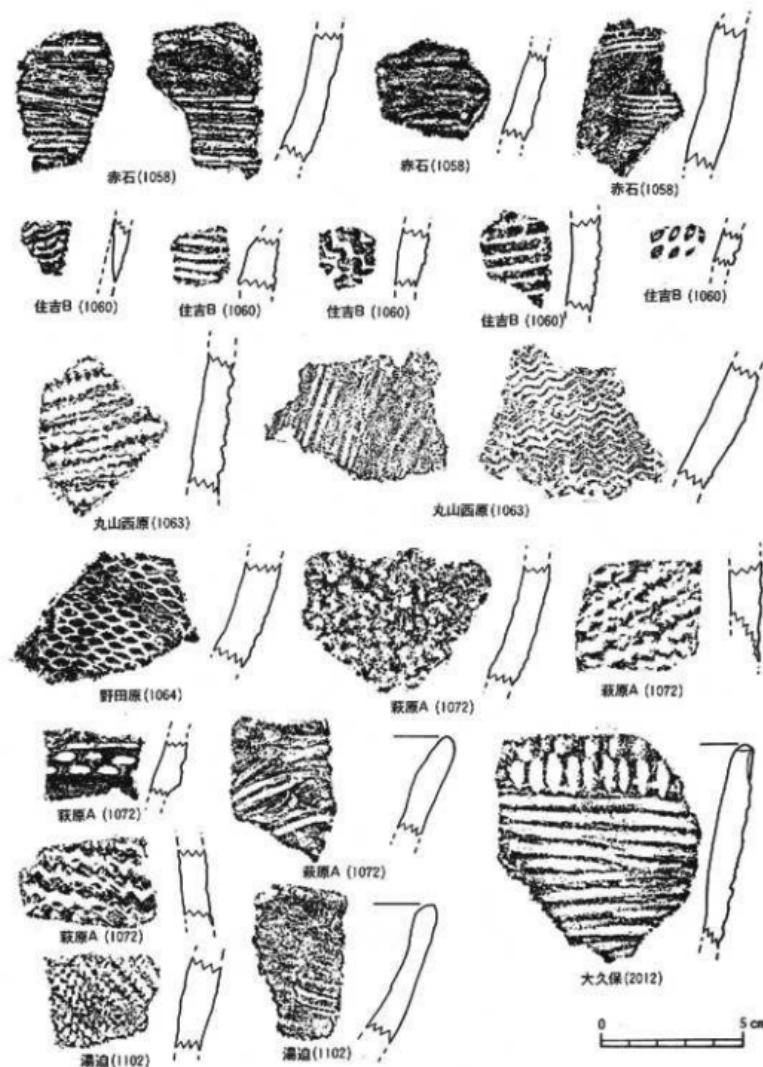




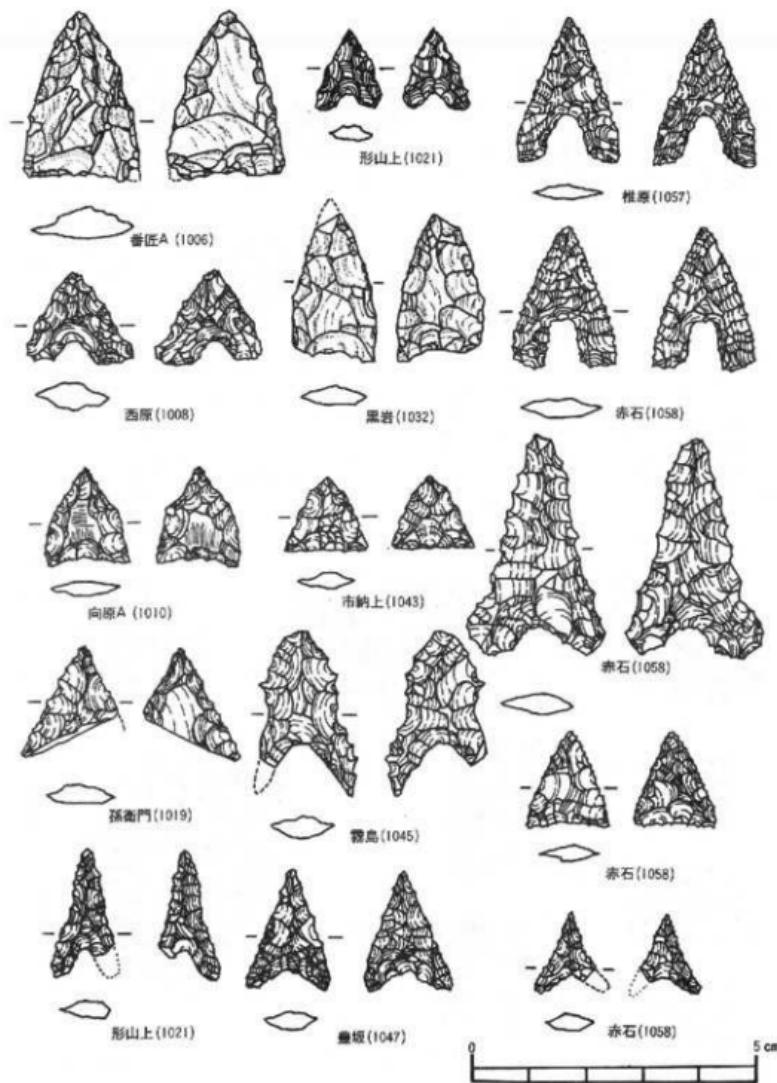
図版1 旧石器



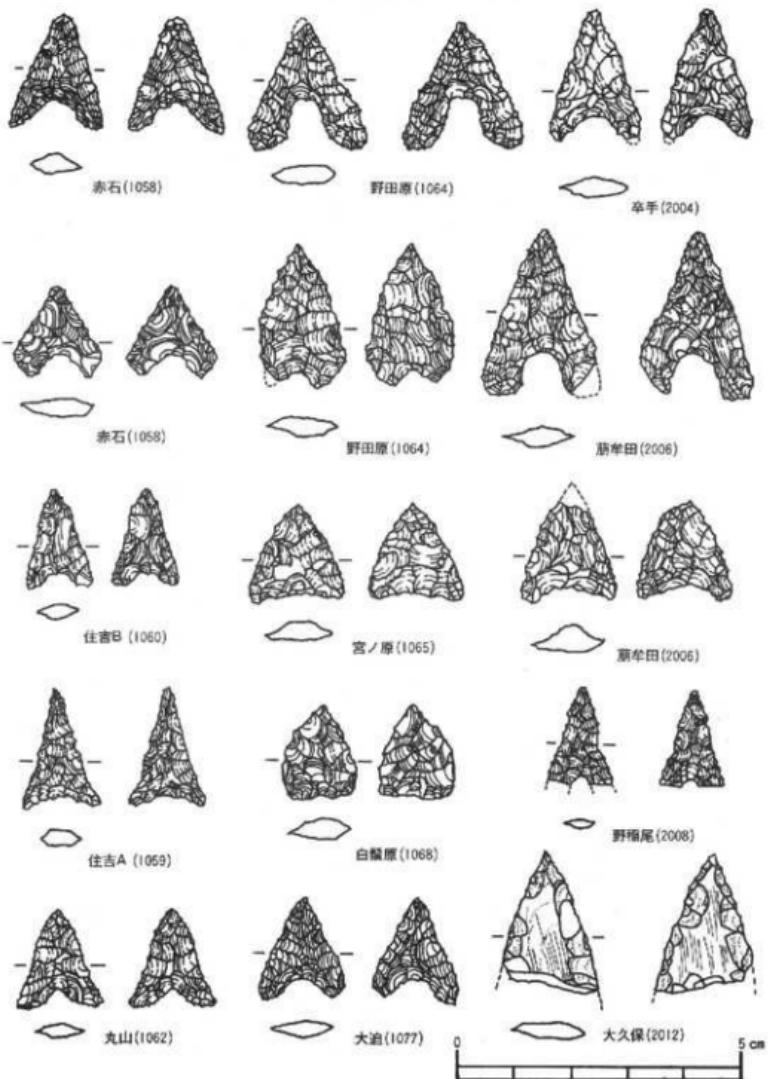
図版2 縄文土器(I)



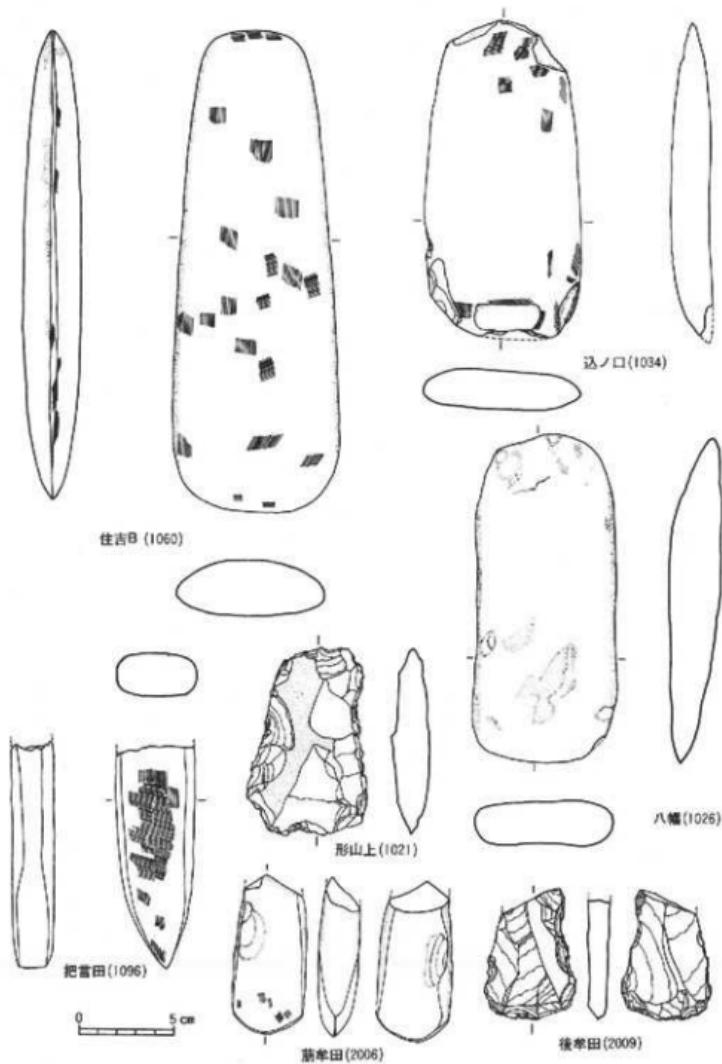
図版3 繩文土器(II)



図版4 打製石錐(I)



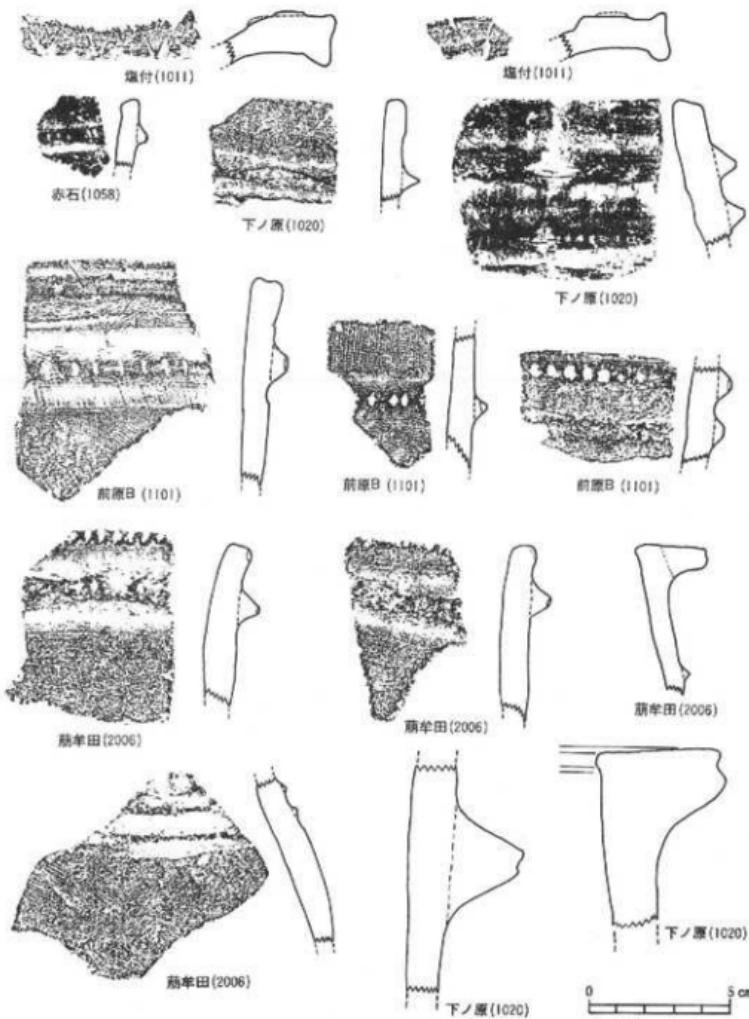
図版5 打製石錐(Ⅱ)



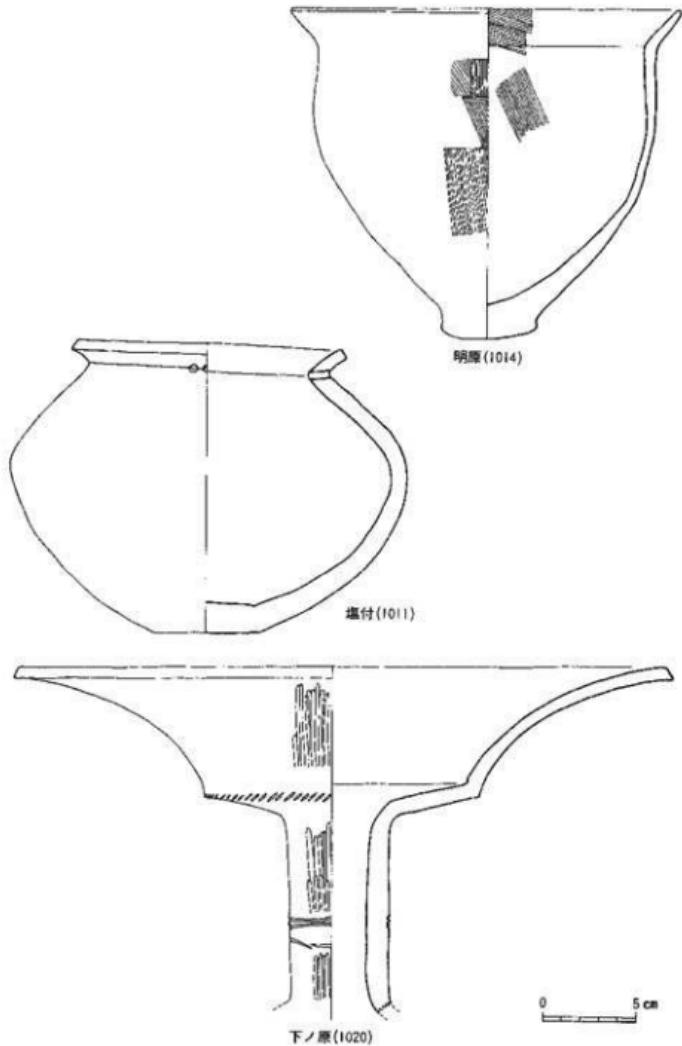
図版6 石器 (I)



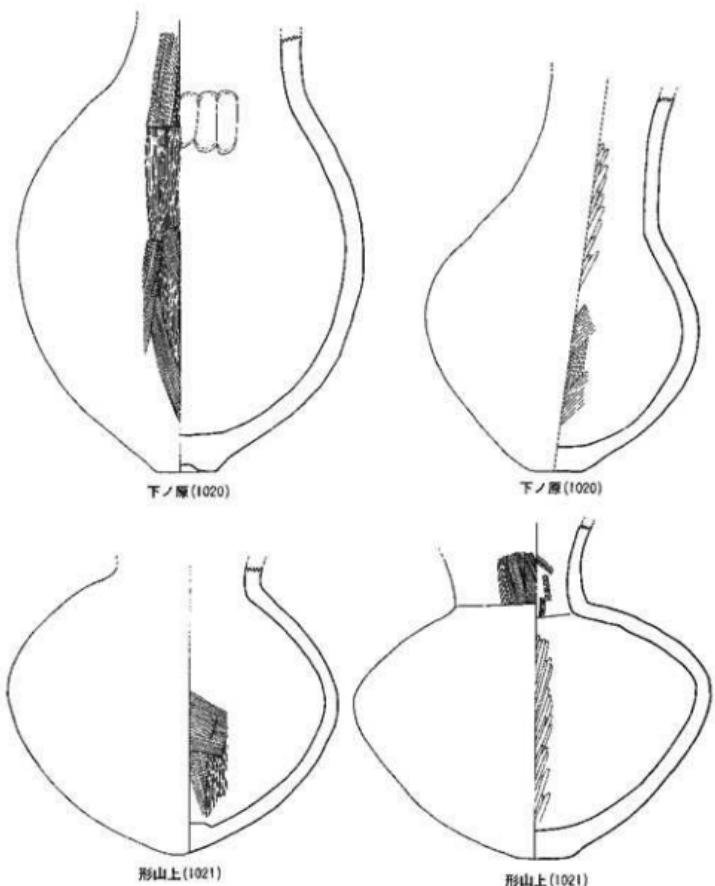
図版7 石器 (II)



図版8 弥生土器(I)

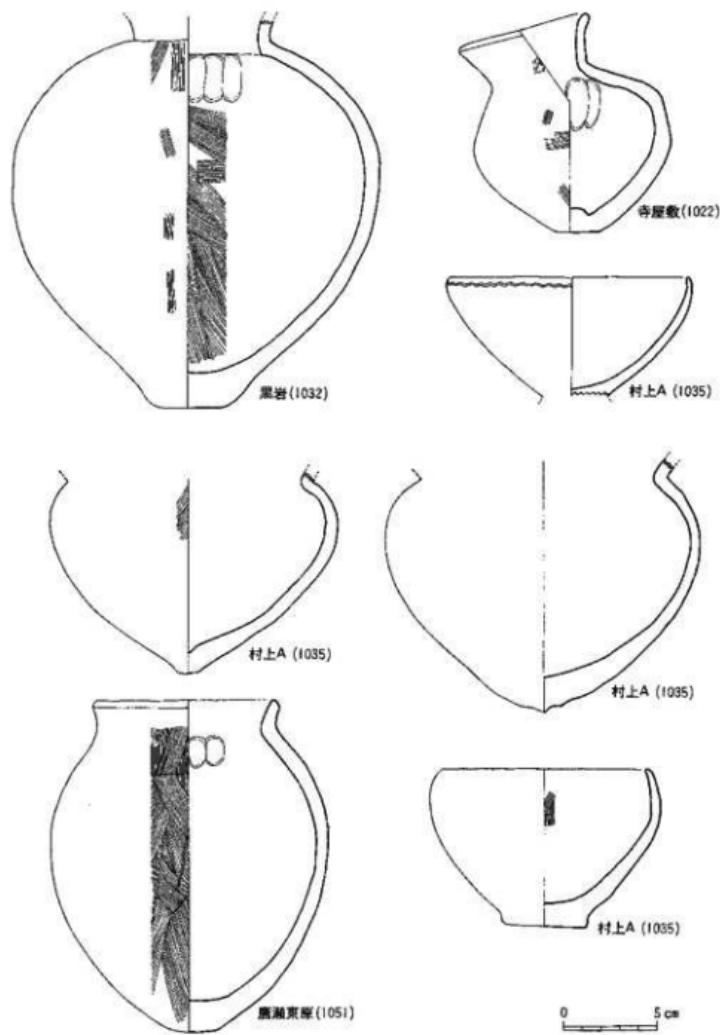


図版9 弥生土器(II)

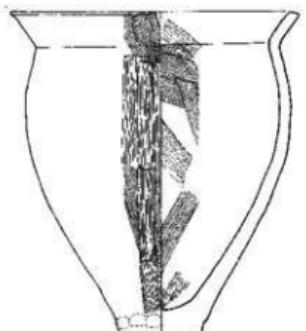


0 5 cm

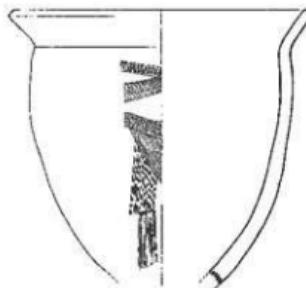
図版10 弥生土器(Ⅲ)



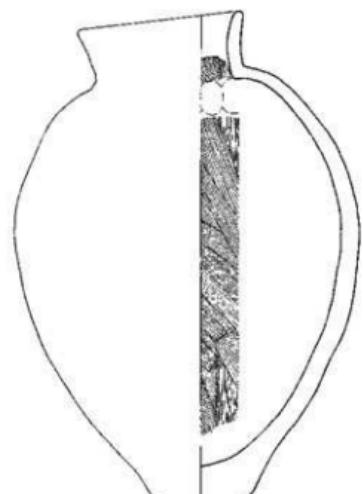
図版11 弥生土器(IV)



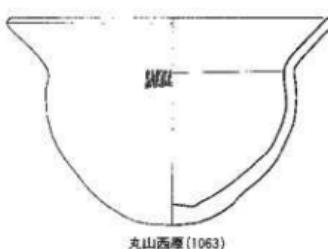
丸山西原(1063)



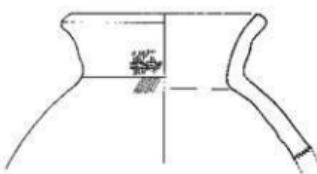
丸山西原(1063)



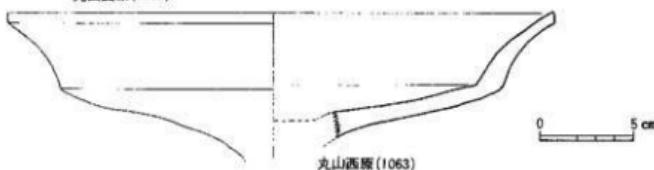
丸山西原(1063)



丸山西原(1063)

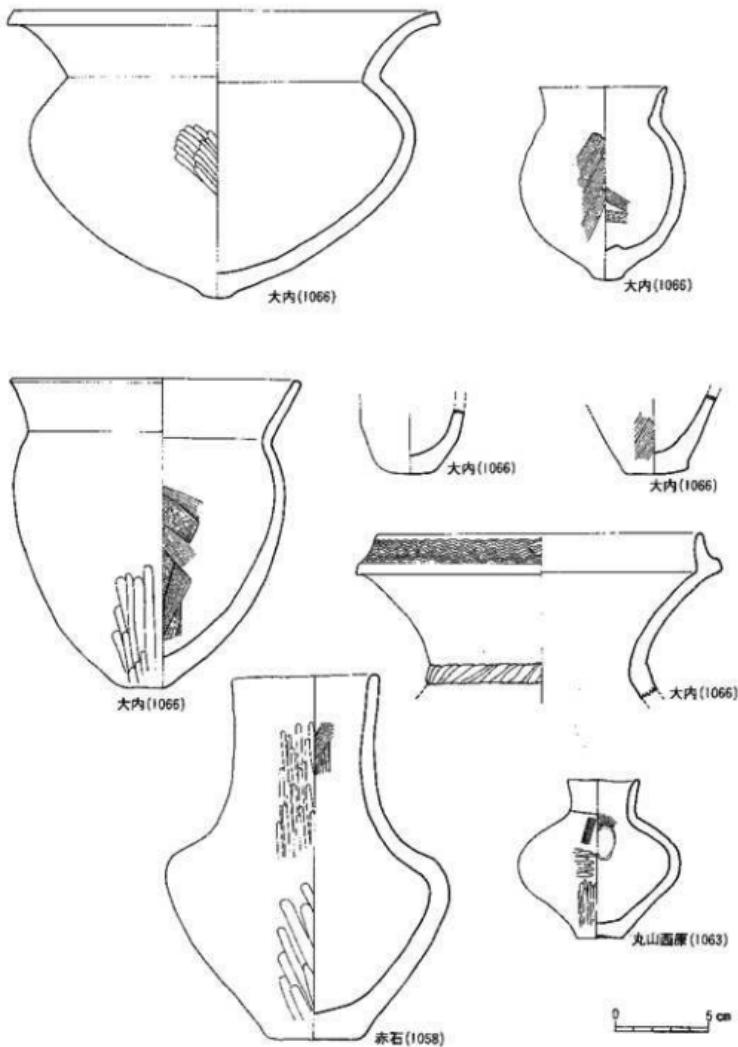


丸山西原(1063)

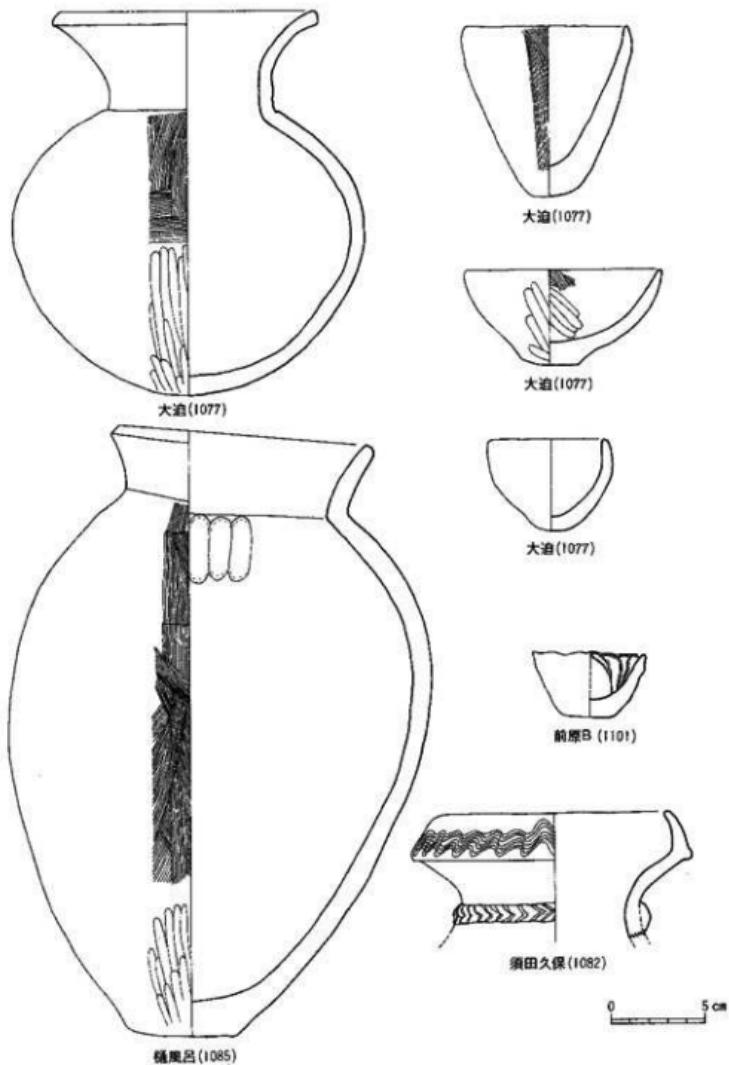


丸山西原(1063)

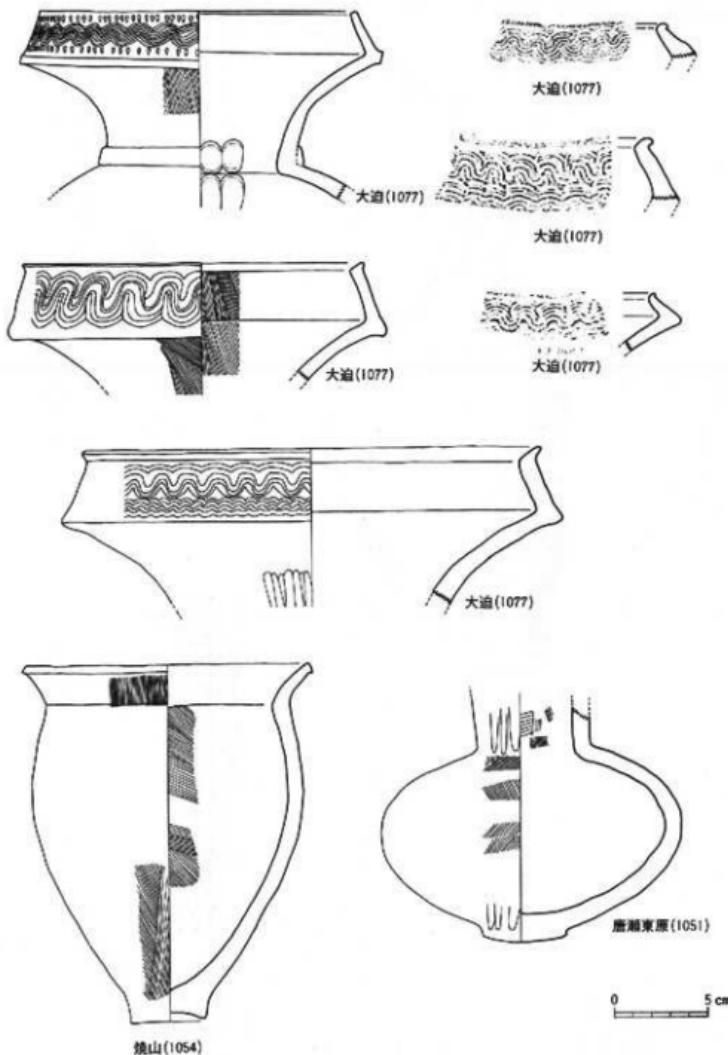
図版12 弥生土器(V)



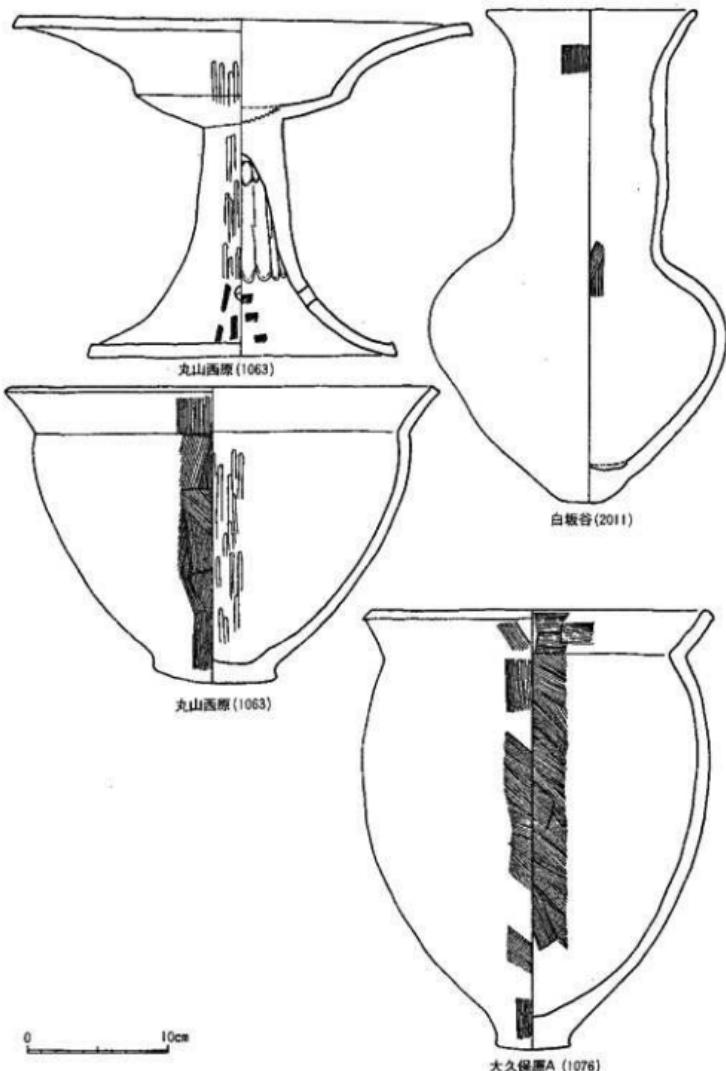
図版13 弥生土器(VI)



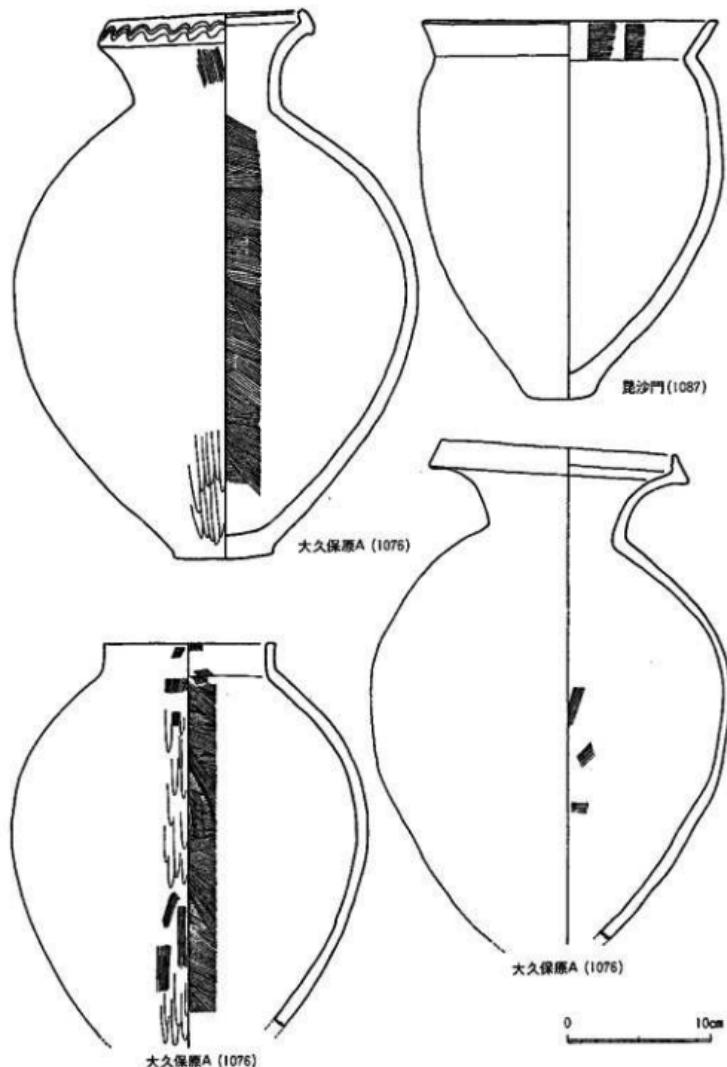
図版14 弥生土器(VII)



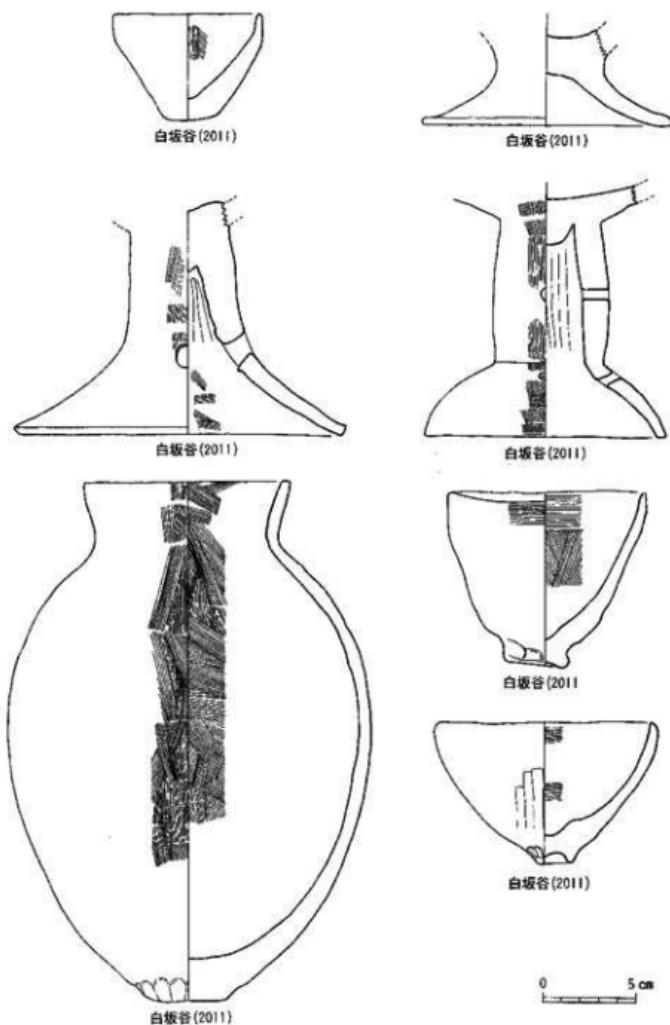
図版15 弥生土器(Ⅶ)



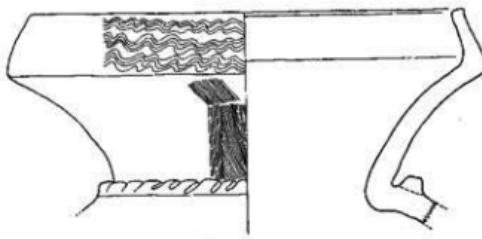
図版16 弥生土器(IX)



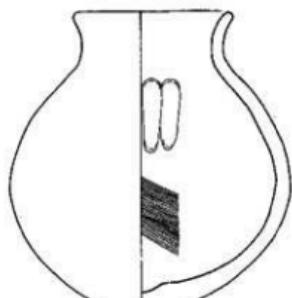
図版17 弥生土器(X)



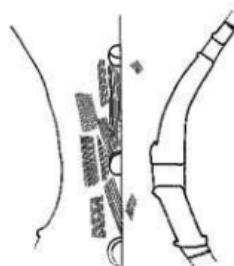
図版18 弥生土器(XI)



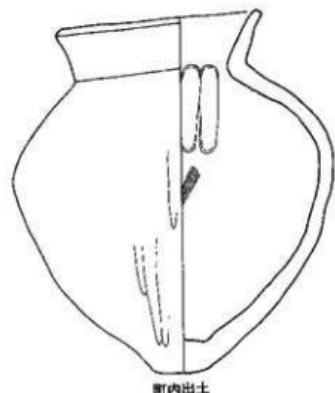
町内出土



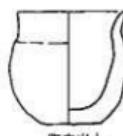
町内出土



町内出土



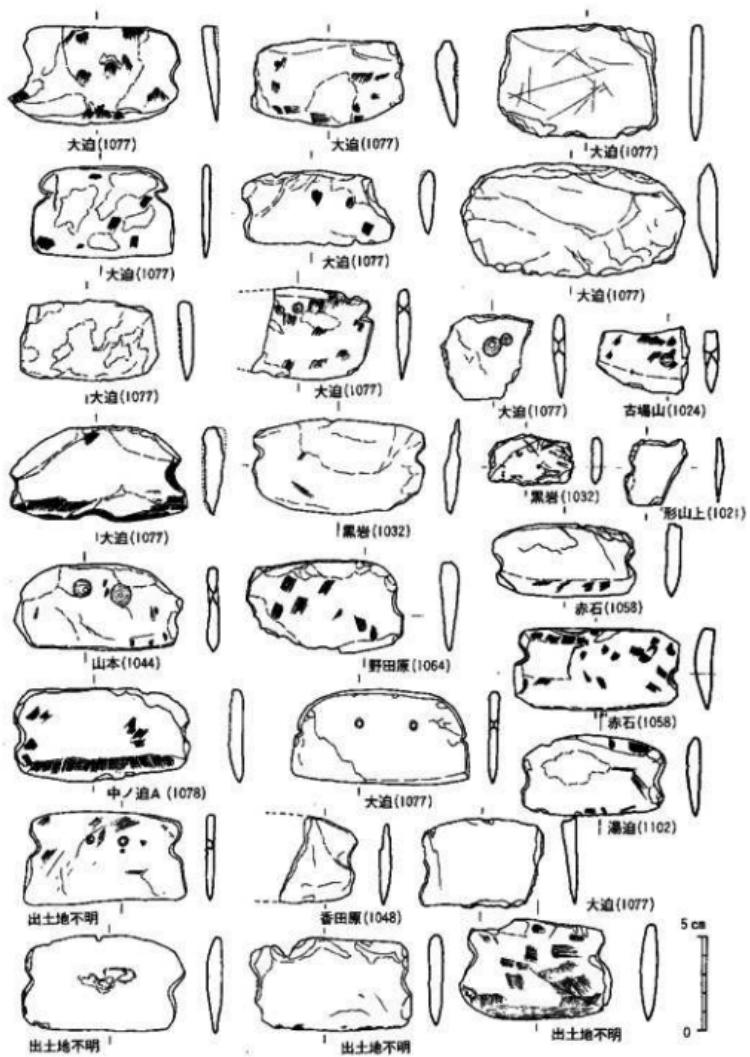
町内出土



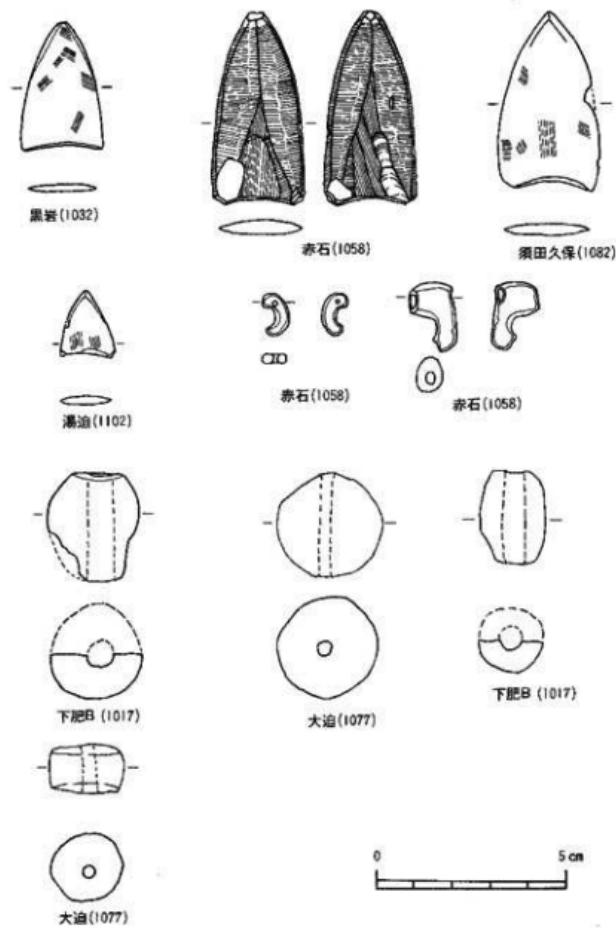
町内出土

0 5 cm

図版19 弥生土器(XII)



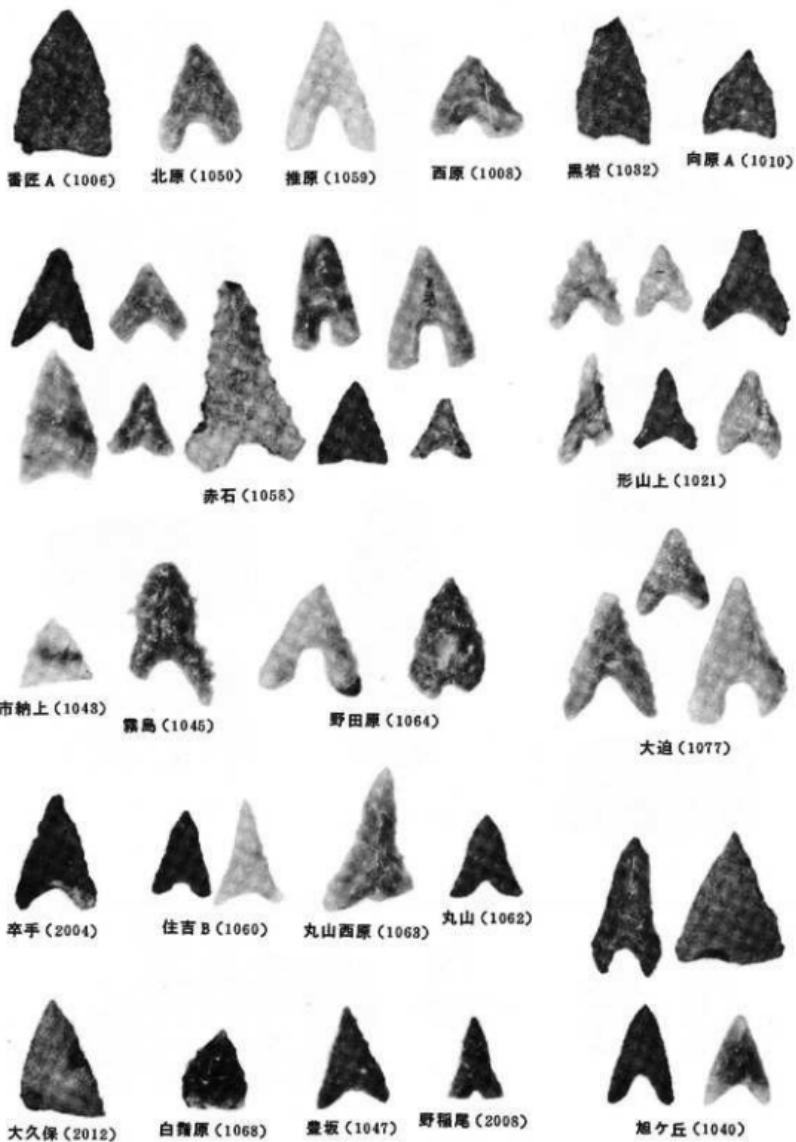
圖版20 石庵丁



図版21 磨製石鎌・勾玉・土錘・紡錘車



図版22 須 恵 器



図版23 打製石鏃



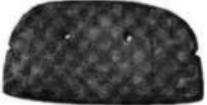
山本(1044)



把言田(1096)



赤石(1058)



黒岩(1032)

住吉B(1060)

大迫(1077)



野稻尾(2008)

赤石(1058)須田久保(1082)

黒岩(1032)

図版24 石庖丁・石鎌・石匙・石斧



塙村(1011)



村上A(1085)



寺尾敷(1022)



唐瀬東原(1051)



大内(1066)



丸山西原(1063)

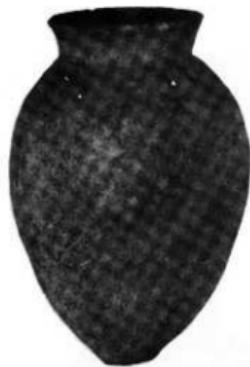


大久保原A(1076)



大久保原A(1076)

図版25 弥生土器



楊風呂 (1085)



白坂谷 (2011)



大迫 (1077)



毘沙門 (1087)



町内出土(出土地不明)



新湯追 (1108)

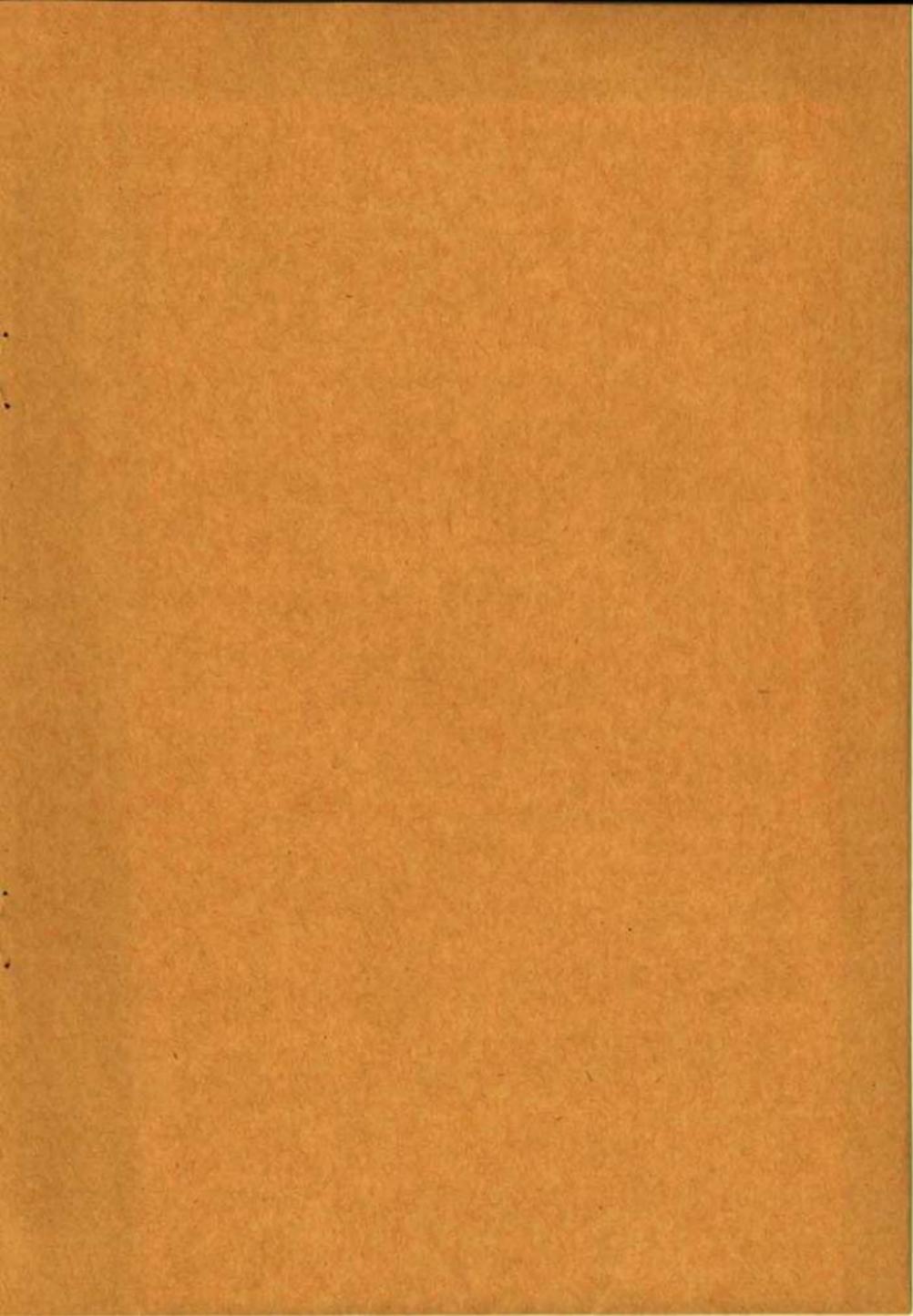


上ノ原北分B (1025)



赤石 (1058)

図版26 弥生土器・須恵器



川南町遺跡分布図

1983. 3
川南町教育委員会

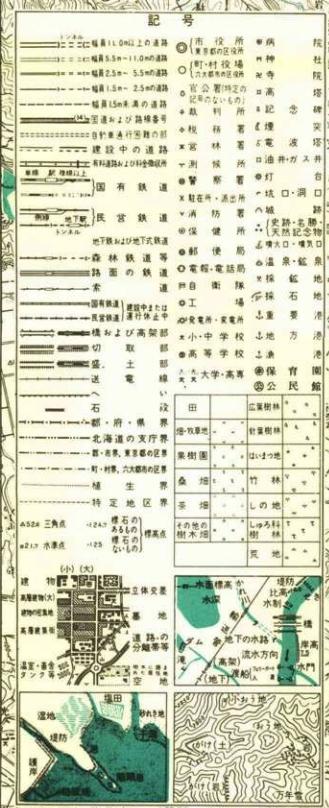
黑林

日向潤

凡例	
(○)	国指定古墳
(●)	古墳
(○)	遺跡範囲

I : 25.000

愛媛県東宇和郡宇和町鬼窪2ノ8 (株)乙媛印刷社



川南町の埋蔵文化財

遺跡詳細分布調査報告書

昭和58年3月31日

編集・発行 宮崎県川南町教育委員会

宮崎県児湯郡川南町大字川南13680番地の1

印刷 横内印刷

